

# ユ ニ テ

UNITÉ

## 11



### 目 次

|   |                    |
|---|--------------------|
| ロマン・ロランの言葉 .....                              | 1                  |
| ロラン＝マルヴィーダ往復書簡(完) .....                       | 南大路 振一訳 ..... 2    |
| マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク .....                      | B. シュライヘア ..... 12 |
| マルヴィーダをめぐる<br>— B. シュライヘア, 片山敏彦往復書簡から — ..... | 19                 |
| 仏独合作テレビ映画<br>《ジャン・クリストフ》の周辺から .....           | 宮 本 エイ子 ..... 38   |
| ユニテの広場 .....                                  | 古 田 泰 子 ..... 41   |
| ロマン・ロラン研究所から .....                            | 42                 |
| 友の会だより .....                                  | 43                 |
| あとがき .....                                    | 47                 |
| 研究所図書目録(4) .....                              | (付)                |



日本・ロマン・ロランの友の会編

## ロマン・ロランの言葉 “ル・コルビュジェに”

ご本をありがたく存じます！ それは、明日には実在するであろうものに向けて放たれた矢のように、逆らいがたい勢いをもっています。私たちの種にくっついている過去の不幸から解放された心地がします。あなたがたは私たちの心配の上に楽観を吹きかけます。ブラボー！ 私は、緑の中に浸ったセメントとガラスでできたあなたがたの都市の——光を飲んでいる杭の上の家々を今からすでに楽しんでおります。ただ一つ私が心配することは、あなたがたがすべての国に同一の建築形態を規定している点です。私は同じ関係を考えますが、しかし違ったもろもろの要素の間のことです。私は規格化を警戒します。それは、あなたの場合には創造的です。それを受け容れる国々においては、精神の怠惰が転げ落ちてゆく傾斜になりましょう。合一の中で、人類の変化の反抗をむしろ刺激すべきではないでしょうか？ また生理学的にも「単調な気候」は重大な不便を来さずにはおかないと考えられませんか？ 人間の勝ち誇った飛躍は、ずっと昔に消滅した他種の動物たちの成形性に比較して、驚くべき発達をとげた成形性を有することに、その一部分を負っているはずです。人間は、暑さ、寒さの変化に対してもまた抵抗する術を心得ていたし、今もお心得しているはずです。人間に、不変の理想的気候を与えることは、人間を弱くする危険を冒します。動きを愛するあなたは、あなたが建築される人間環境の多種多様な条件を受け容れながら、あなたが許す光線の法則の枠内で、自由の余地を人間にお残してください……レオナルドがいったように、それぞれの自然が「その自然の固有の精神のなかで変貌する」のです。…… *Tras mutarsinella propria mente dit natura*……（自然は一つに止まらないのです。）

（交響楽に心を奪われてしまった社会的＝個人主義者）癒しようのない個人主義者をお恕ください。彼は、大地の征服者たるあなたの天才的な個人主義に敬服しながら、自分は脅かされていると思って自己防御をしているのです！ 私の献身的な強い好意を信じてください。

宮本正清訳『どこから見ても美しい顔』から

## マルヴィーダとロランの往復書簡（完）

7月の初めマルヴィーダはローマを去り、メザラツテにいるラウラ・ミンゲツティ夫人のところで数日を過ごした。7月15日に彼女はヴェネチアでロランと落ち合い、彼を同伴してミュンヘン経由でパイロイトへ行った。ロランは——シーズンはじめの——『トリスタン』、『パルジファル』、『タンホイザー』の上演を観て、7月29日にパリへ戻った。（編集者による注）。

### I マルヴィーダからロランへ

パイロイト、ホーフガルテン通4番

1891年7月30日

これでまた手紙だけになりました。したい友よ、私の思いはいつもあなたと共にあります。昨日は比較的よい天気恵まれました。おかげであなたはニュールンベルクを少しくわしく見学できたでしょう。夕方の6時、劇場で私はあなたがちょうど汽車に乗り込むのを思い浮かべました。けさの6時にはシュトラースブルクにいるあなたを想像し、そして今10時にはあなたがもう母国に入り、長旅の終りに近づいているのを承知しています。ああ、心の奥底で<sup>こゝろ</sup>こゝろのように、「もう二度とは！ もう二度とは！」とひっきりなしに繰り返すものさえなければ！ 私は過ぎ去った大切な日々の快い追憶にふけるわけにはゆきません。今はまだ耐えがたいのです。そして『パルジファル』第3幕の崇高な響きでさえも、昨日は私の悲しみを強めるばかりでした。というのも、私はこれを一緒に聴いた日曜日のことを考えたからです。そしてあの聖金曜日<sup>1)</sup>の魔力も私を感動させることは出来ませんでした。（―――）

ヴァーグナー一家は皆あなたのことを尋ねました。そしてジークフリードは外出の際、私が——すでに〔女中の〕トリーナと万事打ち合せてあったので——彼の親

切な申出を断ったところ、少しばかり立腹して言いました、「誇りが高いですね、あなたは。ロランさん以外には同伴されたくないのですね」と。この手紙をすぐ発送したいと思います。あなたがパリにいる間に届くかも知れませんから。ああ、昨年のように、「3ヶ月たてば、また太陽の国で！」と自分にいうことが出来たなら！しかし無情なこたまは告げます、「否！」と。これからはもっと悪くなるでしょう。今はまだ何もかもあなたの存在で満たされています。そしてドアを開けるたびに、まるであなたがソファーに坐っているような気がします。もしあなたのささやかな願いが実現するなら、もっと良いソファーが手に入ることでしょう。あなたができるだけ早く手紙を下さることを私は知っています。そして私がどんなにその手紙を待っているかをあなたは知っています。あなたはそもそも事の始めから私にとって大切な人間です。

M.

#### 注

- 1) 『パルジファル』第3幕の聖金曜日の音楽はこの楽劇のもっとも美しいものに数えられる。

## Ⅱ ロランからマルヴィイーダへ

パリにて

1891年7月31日、金曜日の朝

したい友、まず第一に、あなたから戴いた美しい青色の封筒を使わないことをお許し下さい。引越しのごたごたで見つからないのです。私をもうご存知ですから、秩序と私とはまったく別々のものであることを容易にお考えになれるでしょう。(―――)

ニュールンベルクは面白いでした。しかし近代工業が中世を壊しています。尖った屋根の間から高くつき出る煙突は私の気に入りません。建物にも私は好感をも

てません。このドイツのゴシック様式は固くて、厳しく、軽快さに乏しく、私を威圧します。ゼバルドゥス教会の内部はデューラーの描く肖像画（ミュンヘンの勇敢な騎士<sup>1)</sup>の頭部を思い起こさせます。信仰の狭さと固さの臭いがします。絵画でさえ私の期待には応えてくれませんでした。ここの美術館のデューラーはミュンヘンのそれには遙かに及びません。ただ一つ、ブルクマイヤー<sup>2)</sup>には本当の喜びをおぼえました。これはひじょうに魅力があります。しかしこれにもヴェネチアの影響が感じられます。北方のこれらの貧弱な人間が——彼らのうちの最もドイツ的な人間でさえもが、常にこれほど南方に憧れたとは信じられませんでした。ニュールンベルクでいちばん私を驚かせたのは彫刻です。これほどの美しさを私は思ってもみませんでした。アーダム・クラフト<sup>3)</sup>とペーター・フィッシャー<sup>4)</sup>はけっして忘れることのない名前です。とくに後者——彼の手になる聖ゼバルドゥスの墓<sup>5)</sup>にはすっかり感心しました。そこには装飾的なものへの感覚が露われ、個性的な表現を見事に果たしているだけでなく、また申し分のない威厳とひじょうに多くの優美さがあります。

私の旅の印象はいささか味気ないものです。もう一度それに生気を与えるには精神の集中が必要でしょう。いまは身も心も疲れています。これまで私は他の人間たち——あらゆる国、あらゆる時代の愛する芸術家たちに没頭して来ました。今はより利己的になり、少しばかり自分のものになって、自分の内から生きて行動してみたいと思います。しかしさしあたり私には緑のなかでの十分な休養と、それから忘却が必要です。私の肉体の回復は困難です。そして私の魂のそれはもっと困難です。  
(――――)

私は過去の生活がどれほど遠ざかったかを考えて苦痛をおぼえます。パリの喧騒な日常は私をして現在と和解させそうもありません。フランス国境で私は一冊の文芸雑誌を買いました。吐気がしました。そしてこういった連中を相手にしなければならないのです！

私のことを忘れないで下さい。あなたから遠く離れていることはとても辛いです。お知合いになって以来、あなたが私のためにして下さった一切を私は考えています。それにたいして私は深い愛情と限りない感謝をあなたに捧げなければなりません。

心をこめて抱擁します。

## あなたを愛する友

ロマン・ロラン

### 注

- 1) ミュンヘンの絵画館 (Alte Pinakothek) 蔵のさる祭壇にみられるもの (編集者の注による)。
- 2) Hans Burgkmair (1473-1531). アウグスブルク出身で、デューラーの同時代人。イタリアで修業。
- 3) Adam Krafft (ca. 1450-1509)
- 4) Peter Vischer (ca. 1460-1529)
- 5) フィッシャーが二人の息子と共に 10 年 (1508-19) の歳月をかけて製作。ドイツ鑄造芸術の粹といわれる。

### Ⅲ ロランからマルヴイーダへ

パリにて

1891年8月1日の夕方

したい友、あなたに書くのに2日待つことは、私にはとても長く感じられます。ああ、したい友、なんとあなたの不在が身に泌みることでしょう——あなたのこまやかな情愛、私たちの長い議論、私たちの静かな会話 (そこでは口に出さなくておくのも理解されたのです)。いつもソファの片隅に坐っている私が見えます。(そのソファの色はその日によって変わります)。あなたは私と向き合っています。私たちは沈黙したままです。と、何かの<sup>ひとこと</sup>一言でさまさまの想念が浮かびますが、私たちはそれを押さえようとします。私は虚空を見つめます。しかしあなたの友人としての眼が私の眼をさぐり、その奥底まで見抜くのを感じます。そしてそのほうを向くと、私はそのなかに溢れるほどの好意と悲しみと、そしてまた同情を読み取

ります。(そうです、他人からの同情を好まぬ私の自尊心を傷つけないために、あなたが何と言われようとも、実際それは同情なのです。しかも私の自尊心はそれを大いに必要としているのです。) ええ、打ちひしがれた私が、あなたの眼のなかに、その眼をあれほど悲しくさせる同情を読み取る時、私はあなたが気の毒になり、慰めようとさえして、私自身が考えていることを忘れるのです。—— こういった時はもう過ぎ去りました。これに似た時がまたやって来ればよいのですが。ああ、しかしあれは—— 過ぎ去った時は、二度とは来ないでしょう。人生はけっして留まることはありません。(——)

私はさっそく私のもの [エコル・ノルマルの] 校長のところへ行って来ました。モノー氏の意見では私にたいへん好意をもっていてくれる人物ですが、最初は私を犬よりもひどく扱いました。もちろん私のはじめ率直すぎたのかも知れません。しかし水に飛び込もうとする場合には、私は回りくどいことはしません。「賜暇」という言葉を聞くと彼は飛び上がりました。(私が理由として学位論文や歴史研究を挙げないで、芸術、「文学」を挙げたことをお考え下さい。「あなたは明らかに文学で商いをやろうとしている。」「文学で!」「あんな下らぬもので!」これが彼の言い草です。) 彼は断言しました—— それは出来ない話で、私には認められない—— 私はまだ正式に備わっていない—— 賜暇は実際の教授にだけあり、将来の教授にあるのではない。—— したがって賜暇を願い出るに先立って少なくとも数ヶ月、大学で教えなければならない云々。その口調はそっ気ないものでした。しかし終りごろになって、私が動じることなく、十分な確信を持って答えるのに気づくと、彼は態度を柔げました。私が冗談を言ったり、義務を逃れるための軽率な口実を設けているのではなく、もう一つのより拒否しがたい、より必然的な義務を問題にしていることを悟らざるをえなかったのです。さいごに彼は言いました—— 彼自身としては私が芸術に身を捧げるのを正しいと思う、そして彼の考えるところでは、それによって私は教授として留まる場合と同様に大学に対する義務を果たすだろう、全体として彼は私に敵意を持つのではなく、いざという時には私を助けるだろう、と。

(——) 事態はここまで来ました、したい友。親族一同は私が期待してい

た以上に歩み寄ってくれます。私の熱烈な手紙と『オルシーノ』との印象があまりに強かったので、彼らは皆、大学を断念するという私の決意を了承してくれました。このことで私は彼らにたいし限りない感謝をおぼえます。いま父は私をジャーナリズムの世界に押し入れようとする熱意で私をほとんど当惑させます。私には大学と同じ位、恐ろしい世界です。『オルシーノ』についての彼らの判断は面白いです。そこには一致がみられません。祖父は第1幕には文句がありますが、第2幕には感動しました。しかし第3幕がいちばん好きです(カタリーナ!!)。妹は第3幕をもっと獨創性に乏しい幕とみなし、第1幕のほうを取るようです。父は私が時折(意図的でないことは彼も認めるのですが)誰かを模倣している、と打ち明けました。その誰かとは——ご見当のつかぬことは確かです!——ヴィクトル・ユゴーです。この賞賛(父の目には賞賛です)は私を打ちのめしました。それから私は大笑いしました。父がこれ以外になお特に高く買っているのが何かお分かりですか? 第1幕のリオナルドの演説と第2幕の木陰での独白です。(妙な話ですが、私自身は考えてもみませんでした。)さいごに母が第1幕とリオナルドを好いていることはご承知のとおりです。私が好いているのはオルシーノです——オルシーノだけで他の人物はちがいます。——忘れていましたが、祖父はカタリーナとオルシーノの恋はあらかじめ準備できないものかと尋ねました。私はこのままが真にイタリア的なのだと抗議しました。すると彼はこれではフランス的でない、と答えます。なるほど。わが尊敬すべき祖国では、一般に、その「件」(婚姻のことです)のもたらす物質的・金銭的な利益を双方が十分に認識することで電光<sup>1)</sup>の用意がなされるのを私はよく知っています。しかしルネサンスの人間は簿記掛ではありませんでした。彼らは今日の人間ほど妥算はしませんでした。それでいて結局今日の人間よりも誤算は少なかったでしょう。彼らは自分たちの真の利害を考えて行動することのほうが多かったのです。

これまでのところ私には昔のものを直したり、何か新しいものを書いたりする時間がまるでありません。田舎に帰れば若干の暇ができるでしょう。しかし是が非でも私がそこに留まらねばならない、あの芸術的=理想的な雰囲気<sup>2)</sup>に浸っているのには、あなたが私のそばにおられることが必要なのです。



(———) 皆様によろしく。ミミ<sup>2)</sup>に私からうやうやしい挨拶を！ これ以上に不愉快なものを彼女に送れないと思います。

心をこめてあなたを愛します。

R. ロラン

当地でパイロイトについて書いた者がまだほとんどないなど信じられるでしょうか！ しかし私には書くべき新聞がないのです！

今すぐお手紙をいただくのなら、クラムシー(ニエーヴル)のクロ氏(祖父です)宛にして下さい。

#### 注

- 1) 愛の情熱の表面化をいうのであろう。
- 2) 若さを気取った身分の高い老婦人(編集者の注による)。

## Ⅳ ロランからマルヴェイダへ

パリにて

1891年8月4日、火曜日の朝

したい友、私がどれほど悲しい思いをしているかご存知なら！ 私の到着いらい、ものの10分と太陽が照ったことはないでしょう。いつも雨模様で、寒く、陰うつです。腹立たしい些細なことが無数にあって私を苦しめます。いちばん悪いのは不機嫌——私の個人的な敵であるメランコリー(と、おっしゃっても構いません)。これがいつも私のそばにいます。私の心から情熱の力が退いたあとへすぐさま巣くう機会をうかがっているのです。そして今はメランコリーにとって好都合です。というのも、私は疲れ切っており、私のなかには情熱も意志も働かないからです。するべきこと、考えるべきことがあり余るほどあるのに、何もせず、何も考えません。賜暇を願い出なければなりません。あまり希望はもてませんが、どこ

か美術館に職を求めなければなりません。ジェフロア氏<sup>1)</sup>には手紙を書き、モノー氏には手紙を書こうとしました。『オルシーノ』を仕上げねばならないのに、まだ手をつけていません。ムネに送られた写しに目を通しただけです。(半ページもの脱落がいくつかあり、いくつかの文章はまるで意味をなしません。ムネがどうして理解できたのか不思議です。)『パリオニー』を続けたいです。『エンペドクレス』を続けたいです。『カリグラ』<sup>2)</sup>を続けたいです。——そして結局、私は何も欲せず、何もしないのです。『ルヴェーブルー』誌とアードム夫人の雑誌にも寄稿を試み、どれかの新聞にパイロイト便りを送らねばなりません。その一方では湯治場に出かけて水治療を受け、十分に休養をとり、仕事をしてはならないのです。それでいて自分の未来を考え、心に涙して過去を考え、生き、おしゃべりをし、おしゃべりを聞き、行動し、そして神的な平安に包まれた最後のまどろみ〔死〕に憧れるという有様です。ああ、ローマの純粋な光、私の女友だちの清澄な世界。——私の魂のなかに漂う霧を晴らすのには、この二つがどれほど必要でしょう！(——)私はどれほど友人たちの愛情に包まれていたいでしょう！これはエゴイズムでしょうか？いいえ、これは孤独にたいする不安なのです。——私の内的本質が私をそこへ閉じこめるあの孤独にたいする。

これで打ち切りましょう。陽光が外界で消えた後は、陽光を私たちの内部に輝かせましょう。私たちの魂を空虚がとりまく今、私たちの魂を満たしましょう。そして世界と私たち自身を新しく創造することに努めましょう！

したい友、あなたを抱擁します。お便りはクラムシーへ。モノー氏の住所をお知らせ下さい。

R. ロラン

私の想像力はパイロイトとその劇場をすっかり再建しました。そしてもはやそこに居ないことが辛いです。あなたがこの——私には消え去った——生活をなお楽しんでおられるのが本当にうらやましいです。くわしい報告をどうか忘れないで下さい。

#### 注

1) 『ユニテ』2, P.13の注2) 参照。

2) 前37—41年のローマ皇帝。

## V マルヴェーダからロランへ

パイロイトにて

1891年8月の初め

したしい友、昨晚『トリスタン』から帰って来るとあなたの3通目の手紙が待っていました。この『トリスタン』は、アルヴェリ<sup>リ</sup>が第3幕で真の芸術家の本領を発揮したために、見事な出来でした。この崇高なドラマの興奮が冷めやらぬうちに、私はいっそう深い感動をもってお手紙を読みました。ああ、外界の太陽がない時にも天才の永遠の光が輝くこの地にあなたを留めておけたなら！ 少なくとも南方の純粋な光の中であなたに再会できることが確実であるなら！ しかし、過ぎ去ったものは二度とは戻らないと自分に言い聞かせる度に私が味わうその悲しみにも拘らず、あなたの最後のことばを読んだ時、私はやはり仕合せであり、あなたを誇りに思ったのです。そうです、創造的な天才<sup>天才</sup>をうちに秘め、「世界と自分自身を新しく創造することができる」英雄的な魂は、あなたの最後のことばのような考え方をするので。この使命にたいしあなたの最上の女友だち——深い愛情と、あなたの成功についての熱い願いとで遠くからあなたを見守るあなたの女友だちの祝福を受けて下さい。

(———) 昨日の午前、私はツッキ<sup>2)</sup>を訪問しましたが、彼女はドゥーゼよりも興味があります。それは飾らぬ人柄だからです。彼女はホテルの食事が口に合わないので、ちょうど台所でイタリア料理をつくっているところで。やはり彼女は良い主婦でもあるのです。(というのは、部屋はひどい散らかりようで、まことにイタリア的です。)そしてよい母親でもあるようです。小さな娘を紹介してくれましたが、とても可愛い子で、ツッキは当地でもこの子のために授業をしてもらっています。それから私たちは芸術のことを話しましたが、私はこの一見、無学な人間の素朴な理解力に驚ろかされました。彼女には芸術家の魂の鋭い洞察力があるのです。彼女は言いました、「信念が欠けているのです——何にたいするにせよ、ともかく信念が。ですから私たちにはもう芸術がありません。懐疑はすべてを殺し、金銭と娯楽だけを狙わせます」と。(———)

昨日夕食のとき、パイロイトの眞の友人たちを——すべての身分や素性のちがいを超えて——互いに結合する絆はどんなものかという問いが議論されました。(——)或る人は「純粹に人間的なもの」がもつ眞実性だと言いました。或る人は簡素さだと言いました。そしてまた或る人は感情の豊かさと言いました。想像力だと言いました。こういう具合です。私は黙っていましたが、心の中ではこう考えました——偉大な芸術においては、私たちは個人、個人の苦しみを脱け出て、天才によってこの現象界に啓示される宇宙的な一体性〔ユニテ〕の中へ帰って行くのだ、と。偉大な芸術において——私たちを打ちのめすその悲劇的な内容にも拘らず——私たちに純粹、崇高な喜びを与えてくれるのは、まさにこれなのです。どう思いますか？

したい友よ、何よりも健康に気をつけて下さい。身体が丈夫になるにつれて精神の力、創造的な力も回復するでしょう。私の眼がもはやあなたに言えなくても、私は心をこめてあなたのことを考え、心からあなたを愛します。

M. M.

#### 注

- 1) Max Alvary-Aschenbach (1856-98). 有名なヴァグナー歌手(テノール)。
- 2) 『ユニテ』9, P 14の注2) 参照。

#### 〈 訳者あとがき 〉

『ユニテ』復刊(正確には再復刊というべきか?)を機に、その第2号のために、ベルタ・シュライヘア編『ロマン・ロラン=マルヴィーダ・フォン・マルゼンブーク 或る往復書簡 1890-91』(1932)の最初の部分から「とりあえず6通をえらんで」訳してみた。もう6年前のことである。求められるがままに、それ以後の分からも選択、連載して今回にいたった。これで同書に収められた137通(マルヴィーダ67通、ロラン70通)の半分ちかくを紹介したことになる。この貴重な「精神の記録」を十分な日本語に移しえたかどうか、筆をおいてみて心許なく思われるが、この仕事が、ロランばかりでなく、編者シュライヘア女史(1889-1969)自身にも多くを負う者のささやかな感謝の印しとなれば幸いである。

(1980年3月はじめ)

南大路 振一

## マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク

ペルタ・シュライヘア

臨終の床のアレクサンダー・フォン・ヴァルスベルクをヴェニスに見舞ったあの悲しい訪問の後に、マルヴィーダはまたしても夏と秋とをヴェルサイユのモノー家で暮す。オルガの母としての喜び、母としての心づかいにマルヴィーダは愛を持って助力を与え、子供たちの日常のこまごまとした才能の活動に彼女も仲間入りし、またガブリエル・モノーの精神上の関心へ彼女も参加する。モノーは彼女に、彼が師範大学で担任している級の学生たちが大いに有望であることをマルヴィーダに話す。そして或る晩——その年の季節は早くも秋の色彩に移り、ヴェルサイユ宮の庭の樹々は冬枯への用意をする——モノーはヴェラ・アミエルの小さな応接間で彼の愛している一人の学生をマルヴィーダに紹介する。この学生はまもなくローマのパラッツォ・ファルネーゼに行き住み、この建物の中に在るフランス考古学・歴史学学館で、エコール・ノルマルの給費留学生として二年間勉強するはずである。その名はロマン・ロランである。

モノーがこの晩仲介したこの一つの出会、それは私たちに、老婦人の一生と若者の一生とのそれぞれに天の恵みの贈りものという感じのするものであり——永遠の昔から予定されていたものであるかのように多くの人々が感じる、そんな種類の出会の一つである。しかし最初の邂逅だけでは、そこから稀有の深さと切実さを持つ魂の結合が生じるだろうとは全く予測さるべくもなかった。いや、若いロランは識り合ったばかりの人の名をたちまち忘れさえた——その名はフランス人にとって

はおぼえにくいものである！ それから12月に彼がローマでマルヴィーダを訪問したとき、彼はガブリエル・モノー宛の手紙の中で彼女のことを Mademoiselle de Meysenberg マドモワゼル・ド・マイゼンブルクとか Meysingen マイジンゲンとか呼んでいる。しかし早くもマルヴィーダはこの若いフランス人の最初の訪問後に、彼の謙遜さと堅実な教養とに喜びを感じる。彼はまだそんなにも若いのに精神の大きな拡がりの中に立っており、また彼の天性はこの上なく微妙なニュアンスに充ちているので、この天性は用心ぶかく慎重にみちびかれることを求めているのを彼女は自発的に認識する。彼女の生涯の晩年に、運命が彼女に授けた任務としてそもそもこれ以上に好ましい任務があったろうとは思われない。

ロランはローマに来た当初には心にほとんど憤懣を感じていた。というのは、フィレンツェと、そこで観たフラ・アンジェリコ作の清らかな絵とがあまりにも彼には大きい魅力を感じさせていたからである。彼の最大の譴歎には常に必然に一つの強い拒否とはげしい一つの対決とが先行すること——これはあたかもロランにとって生の法測であるかのようなのである。それゆえローマとの彼の関係においても同様であったし、その後ゲーテとの関係においてもそうであった。しかも数週間後には彼はローマの魔力につかまれる——そして、その後は、もはやこのことに変化はない。しかし彼に、永遠の都を一つの真実な故郷としたところのもの——それは、古代ローマの大半円形劇場の遺跡の近くにあつて当時はまだ辺鄙な片隅だったヴィア・ポルヴェリエラの通りの浪漫的な住居——そこに母らしい女友だちが彼のために住んでおり、その人に対して彼の手さぐりしている、内気な魂が少しずつおもむろに開かれ始めた、その住居なのであった。

若い心が感激することのできる可能性の全部を挙げて、また比判への要求を伴って、また、万事につけて早急に決定することはできにくい年齢のいろいろな問題と葛藤とを心に持って、彼は「理想主義者」のもとに来、そして彼を全く理解する最初の人間を彼は見出した。生活のための義務として職業をえらばなければならないことと生を芸術創造によって形成する仕事と、その両方が不安な問題となって彼の心を押しつけていた。彼は教授になるか自由な詩的創造の仕事に献身するかとの二途のあいだで迷っていた——すなわち、外的な安定を取るか、それとも不安定で格闘

に充ちている未来をえらぶかの二途のあいだで。マルヴィーダはまだ全く無名の、孤独な、そして成長の途上にある青年の未来の偉大さを確かな実感によって見抜き、彼のエネルギーを呼び覚まし、苦闘しながら光へ出ようとする創造力を彼女のこまやかな理解によって助力し、彼の使命についての彼女の的確な認識によって助力した。ロマン・ロランのうちには文学的業績を遙かに超える一つの使命がまどろんでいることを彼女は悟る。ロランは精神と魂とにおいて人々を導く仕事をするように生れついている人間であることがマルヴィーダに解る。ロランのうちに彼女は「世界を一つの理想的再生へ呼び覚まそうとするだろうような、一つの強い、そして同時に柔和な声」を予感する。既に1891年に、ロランの書いたものがまだ一行も印刷されたことがなかったときにマルヴィーダはロランに書く

「将来いつかあなたの名がフランスの偉大な人々に仲間入りして言われるとき、あなたは思い出してくださいね——あなたの使命の朝紅に挨拶し、あなたの<sup>デモン</sup>魔神の権利を擁護した一人の女友だちのことを。」

ここで私たちが触れているのは一つのおどろくべき直覚的理解力である。その直覚的理解力をマルヴィーダはその高齡の時期に、これを最後のものとして、しかも最もみごとに最も堂々と証拠立ててみせた。ロランが世界的に認められるのを経験するほど長くはマルヴィーダは生きることはできなかった。しかし若い友の天才的精神についての彼女の確信は、外的事実によって立証されることを必要とはしなかった。後年のロマン・ロランが示したいろいろなもの、むしろほとんど全部のものが既に萌芽的にローマ時代の彼のうちに生きていた。当時早くも彼はモーツァルトについての論文を書いたが、これは後に『昔日の音楽家たち』に収められたあれである。彼の大作『ジャン・クリストフ』のヴィジョンは25歳のロランが〔ローマ郊外の〕ジャンコロの丘を散歩していたときに早くも彼の心におそいかかって彼の心に宿ることになった。ゲーテについてはマルヴィーダとロランとのあいだに一つの小さな論争が燃え上った。ロランはゲーテの圧倒的影響力に抵抗して自己防禦をする。「おお、このゲーテ、私は彼を〔アンドレ・〕シュアレスに抗して何度も擁護します。しかし、あなたが私にゲーテを愛させようといくら努力をなさってもそれはむだでしょう」とロランは言う。しかしマルヴィーダは彼女の方針を押し通す——

「私は将来あなたがゲーテを好きになるようにしてお目にかけましょう。」これがどんなにうまく成功したかを、ロランが後年ゲーテについて書いた著作が証明しており、1932年のゲーテ記念祭の年に彼の書いたことばが証明している——

「ゲーテのような人の魂を理解するには時間がかかる。そのためには人間一生の間ではほとんど足りない。ゲーテが今や私にとって何を意味するようになったか、それははっきりしている。彼は近代における《生きること》の最大巨匠である。」

若いロランは彼の最初の戯曲数篇の原稿をマルヴィーダに見せたが、それらは彼女に非常に多くの、正真正銘の劇的感動を味わせたため、それに比べると他の若者たちの才能が色褪せて見えるように彼女には思われ、ロランのために舞台への道を、彼女の紹介によって開いてあげようという気になった。そんなわけでロランの発展は、彼がローマのマルヴィーダのところに一人の息子のように出入りし、彼女の配慮に富んでいる愛情と清澄な叡智との暖い光に照らされたあの頃に始まる。ロランの壮年期の仕事と活動とはマルヴィーダから鼓舞と方向づけと、最も強い刺戟とを受ける。彼女はロランの普遍的教養を促進させ、また彼のモーツァルト論と彼の最初の戯曲『オルシーノ』とをドイツ語に訳すことによって彼の翻訳者となる。しかし初恋の悩みが若い友の心をゆさぶったときマルヴィーダは彼のために心配する。彼がそのために自己を見失い、自分の仕事ができなくなるかもしれないことを気づかう。なぜなら、神経の精緻な彼の性質にとっては、魂のどの体験も存在の最も深い根にまで影響することを彼女は知っているから。

音楽の偉大な精通者ロランがマルヴィーダの家でピアノをひいた多くの晩は、若者と老婦人とのあいだの友情の絆のために花咲く最も美しい祝祭の時であった。ドイツの最大の巨匠たち、ヘンデルとバッハ、ベートーヴェンとモーツァルト——中でも特にベートーヴェン——の諸旋律が室の中に鳴りひびいた。

ベートーヴェンの音楽をマルヴィーダは一生を通じて熱愛したし、ロランは既に少年の頃ブルゴーニュの故郷の小都市で、好奇心と驚歎と畏敬とをもって自発的に敢えてベートーヴェンに親しんでいた。そしてベートーヴェンが——彼の『ミサ・ソレムニス』、彼の『ディアベリによる変奏曲』、彼の大きいソナータ諸作が——今や二人の理想主義者たちにとってはどんな言葉よりも以上に透徹的に語るのである。



そして既にこれらの時間の中でも、後年のロランがその創造力の最良の部分を引き出したあのベートーヴェンについての著作の中で表現の形を取ったことによって私たちに示されたものの多くが、早くもロランには体得されていたのであろう。

マルヴィーダは聴いて感受することの術を立派に体得していた。ロランがひたすら音楽に精神を集中してピアノを弾き、二人が共に無言で聴き入るそれらの夕べに、マルヴィーダの心には、その後ヴェルサイユの女流彫刻家クラウディーネ・フランク＝プレントーノ——この人はプレントーノ家の生れであった——が1892年の浮彫作品にしたロマン・ロランのきっぱりして精緻な横顔がたびたび印象づけられたことだろう。

このローマでの友情の時代からの今一つの情景は一枚のバステル画のように柔和で穏やかな感じのものである——それはヴィラ・マッティの庭に居るときのマルヴィーダとロラン！彼らがたびたびいっしょに時を過ごしたこの場所にこそ、ローマのどの場所にも増して、彼らの記念が常に生き生きと生きていることであろうと私たちは信じる。庭の端に大理石のベンチが一つあって、それには意味深い次の銘のある記念の碑がついている——「聖フィリップス・ネーリがこの場所でその弟子たちと神のことどもについて話し合った。」このベンチは広い庭の中でマルヴィーダとロランとが特に好んだ場所であった。音楽の世界の中でと同様にこの自然の中でも最も内的な性質の体験を共にしてそれを祝祭するためにこの庭を訪れる二人の静かな訪問者の美的感覚にとって、このベンチは全くふさわしかった。

年齢から言えば50年のへだたりがある、これほどの歳の違いの制限を超えて二つの魂がこれほどにも共鳴したことは、どう考えてみても神秘であり奇蹟である。

「君を理解する友は君を創造する。そういうことわざの意味において私はマルヴィーダによって作り出された」とロランは35年後に書いた。青年の人と老年の人の友情が実現したところの、友情そのものが実現したところの最高の創造作用がこれ以上深く、これ以上切実に証明されたことは曾てなかった。

しかもこの友情は異なる年齢の二つの世代を結びつけたばかりでなくまた二つの国を結びつけ、一つの全ヨーロッパ的理想、一つのヒューマニズムの理想を実現した。ドイツとフランスとの精神の宝の最も良い遺産がマルヴィーダとロマン・ロランとに

生きる。ドイツの文化とフランスの文化とがこの二人の裏において出会す。マルヴィーダはロランに、ドイツの本質の在り方へ到る道を開き示し、ロランはマルヴィーダにフランス古典家たちの諸作品を近づける。こうして彼らの裏で、ロランの曾て言った「西欧の両方の翼」（訳註『ジャン・クリストフ』の中でオリヴィエがクリストフに言うことば）が相触れる。そしてマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークとロマン・ロランとこの一対の名は永久にドイツとフランスとの結合の生きた象徴であることをやめないだろう。

1891年の夏にロランがローマの考古学学館に滞在する期間が終了する。この二年間の完了の記念としてマルヴィーダはロランと同行してパイロイトの祝祭劇に行くが、これはマルヴィーダの最後のパイロイト行であった。老境に澄み切った彼女の心は、曾てはあんなに深く根をおろしていたあのパイロイトの文化世界に完全な自覚をもって別れを告げる——そして一方、多望な青年ロランは、やがてかすかすの苦闘と幻滅とを味わうはずの未来の仕事のために、この時のパイロイトで励ましを汲み取った。ここでの祝祭的な時間が、今一度、彼ら二人の心に生きている最も精妙な最も善いものの、互いのひびき合いを起す。

ヴィア・ボルヴェリエラでのローマ的な夕べ夕べに親しく会って対話の声を取り交す時期は過ぎ去った。しかしそれに代ってこまごまと手紙を書き合う文通がつづく。口に出すことばによっては心をうち明けにくいロランの内気な、ひかえめな性質は、手紙によって全く心をうち明ける。彼のあらゆる気分、あらゆる懐疑と困惑、あらゆる抱負と、内から迫り湧き上る創作のあらゆる計画を彼は遠方の親切な女友だちに書き送る。マルヴィーダとロランとは、たがいに造形美術のこと、音楽のこと、詩のこと、風景のこと、哲学のことを手紙に書く——しかしいちばん深い根本のところ二人にとって最も大切な問題は魂の関心事、倫理的な諸目標、或る一つの理想精神であり、これは善であり美であるものを宗教的熱意をもって信じ、そしてその善であり美であるものを現実生活の中に実現しようと努める精神なのである。

ロランはマルヴィーダの死後30年が過ぎた頃にこの文通の一部の発表を決心した。そして読む人々の心をつかむ、力のこもった表現の「感謝の歌」をその書簡集の序文としたが、この「歌」はマルヴィーダへのロランのいろいろな思い出を取り巻く。

そのおかげで私たちはあの二人の魂のあいだの、全く独特の、魅力を持つ対話を追体験することができる。これらの手紙は「精神の愛の小説」と呼ばれ、また「魂を奏でる室内音楽」とも呼ばれている。たしかにこれは、人と人とのたがいに語り、たがいに書き合うことのできた最も美しいものの一つであり、そしてたしかに私たちは、絶対の相互信頼のこの天体的世界の中へ畏敬と感謝の情を感じながらはいつて行くのである。

死の入口に到るまでマルヴィーダとロランとの友情はつづいた。彼女の死に先だつ二ヶ月のとき、彼女の病は既に重かったが、ロランがフランス演劇を改造しようとして懐いている改革的な考えにマルヴィーダは活発な興味を感じて、それについて詳細に知りたいという望みを彼女からロランへの最後の手紙の中で書き、そして彼女の若い詩人の友の天才力を初めて彼女に感じさせたあの最初の戯曲のことを今一度ロランに書いた。マルヴィーダの生涯の最後の数週間に、今やロランも、彼が誰にも言わずに秘めていた作品の構想『ジャン・クリストフ』の構想を、ついにマルヴィーダにうち明けた。ロランは果してその瞬間に既に自覚していたのだろうか——あの小説の中で最も愛すべき二人の人物、心情に充ちている老ベーター・シュルツとそしてものしづかな娘モDESTAとのまわりに、マルヴィーダその人の生かしていた調和のかすかな反映が来て宿るようになるだろうことを？

ロランの『ベートヴェンの生涯』も彼から贈られてマルヴィーダの手にとどき、これを読んでマルヴィーダは心がさわやかに力づくのを感じた。彼女のまなざしは次の文章から永いあいだ離れなかったことであろう——

「思想もしくは力によって勝った人々を私は英雄とは呼ばない。私が英雄と呼ぶのは心によって偉大であった人々だけである。」

マルヴィーダは臨終の床からロランに電報を送る

「私は〔生涯の〕端に居ます。そしてあなたに私の祝福をおくります。」

若い友からの最後の手紙を彼女はもう自分で読むことができない。彼女はそれを読んでもらって聞く。彼女はそのレター・ペーパーを、もうほとんど不随になった手に持たせてくれとたのむ。そしてかすかに Grazie, caro, buono! 「ありがとう、親しい、善い友よ!」とささやく。

ロランはこの時間に、ローマからは遠いパリでベートーヴェンのピアノ・ソナタ作品106の偉大なアダージョを弾いていた。これはそれまでに二人が別れを告げるときの時間をたびたび浄化した音楽である。そしてロランはモノーの娘の一人オルガへの手紙に――

「私たちはマルヴィーダを私たちの魂の中にしっかりと守りましょう――私たちの存在のいちばん貴い、そしていちばん善いものとして。」

この言葉に、ロラン自身その生涯の最後まで忠実であった。

(片山敏彦訳)

## マルヴィーダをめぐって

—B. シュライヘア=片山敏彦往復書簡から—

ミュンヘン、フリードリヒ通り

1926年11月10日

尊敬する教授！

この手紙と同時に、出版されたばかりのマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークの書簡集<sup>(1)</sup>を一冊お送りすることを許していただけでしょうか？ わたしは『ロマン・ロランの友らの書』に寄せられたあなたの一文<sup>(2)</sup>のなかで、あなたがあの「気高い理想主義者<sup>イデオロギスト</sup>」のことを美しく言及しておられるのを見て、ほんとうに心から嬉しく思いました。あなたの言葉からわたしには、あなたがこれまでもうマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークの世界に接しられたに相違ないことがよく分かりました。それでわたしは、はるかな東方では恐らくまだ知られていないこれらの書簡、そしてその中でマルヴィーダが彼女の若い友ロマン・ロランについて多くのことを語っ

ているこれらの書簡をみられて、あなたが喜ばれることもあろうかと考えた次第です。マルヴィーダの遺稿を管理し、彼女への追憶をはぐくむというわたしの生涯の責務は、わたしをロマン・ロランと、彼をめぐる人びとへと導くことになりました。彼を敬愛する人びとは、全世界に散らばりながら、自分たちを一つの大きな共同体のように感じます。『友らの書』から、ことに若い日本がどれほどロマン・ロランをよく理解しているかを見るのは、まったく素晴らしいことです。わたしはあなたが寄せられたあの美しい一文をレマン（ジュネーヴ）湖畔で読みました。それはロランの居所からさほど遠くないところで、わたしは毎年、マルヴィーダの養女のオルガ・モノー＝ヘルツェン（ゲルツェン）とともに何週間も滞在します。彼女もまた、あなたがマルヴィーダのことに触れ、しかもマルヴィーダが神聖にして厳粛な瞬間にその養女に遺言として書き録した、ゲーテの素晴らしい一句<sup>(3)</sup>とあのように見事に結びつけられたことを心から喜んでいました。

わたしが先日スイスで『友らの書』の編集者エーミール・ローニガー氏のところへも行ったとき、わたしはあなたの住所を教えてくださいるように頼みました。すべてロマン・ロランを尊敬する者にとって、この『友らの書』は何という大きな喜びでしょう！ これらのページのなかには、わたしたち銘々にとって、自分自身の印象と思い出が何とあざやかに再現していることでしょう！

つまり、ここには、ロランの比類ない創造にたいする深い感謝の念をそのまま口にするという、恵まれた資質の持ち主たちによって、わたしたち銘々の印象と思い出がしっかりと固定されているのです。

どうかマルヴィーダの書簡集が無事にあなたのところに届き、あなたにとって、ささやかな喜びとなりますように――。

ロマン・ロランへの敬意を共にする者として、ここに親しい挨拶をお送りします。

あなたの ベルタ・シュライヘア

#### 注

- (1) *Im Anfang war die Liebe*, 1926. 『太初に愛ありき。』養女オルガがフランスの歴史学者ガブリエル・モノーに嫁いだ1873年から、マルヴィーダの最晩

年1902年までの、約220通のオルガ宛ての手紙を、B・シュライヘアが編纂したものである。

- (2) 片山敏彦著作集2『ロマン・ロラン』の巻頭におかれた、「限りなく人間的なもの——ロマン・ロランへの頌敬」参照。
- (3) 「まじめさを、聖なるまじめさを、つねに身につけて行け。ただそれのみが、生を永遠なものにするのだから」（片山訳）。但し出典は『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の第8巻8章の終わり。

東京府下、井荻町

1928年4月15日

敬愛する友にして姉妹なるベルタ・シュライヘア！

ふたたび春がやって来ました。やさしい太陽はわたしたちにとって日毎に暖かさを増し、金色を加えます。サクラの花は明るい青空のもとに銀色がかったバラ色を見せています。いまわたしは、友よ、心からの感謝と友愛<sup>フレインド</sup>をもってあなたのことを考えているのです。あなたのこれまでの有難いお手紙と、あなたが親切にもお送り下さったマルヴィーダの書簡集に、わたしは涙の出るほどの喜びと感動をおぼえました。わたしの貧しいドイツ語では——いや、およそわたしのもつ言葉では、このわたしの気持を十分に表わすことはできません。

わたしは29歳の日本人です。東京のさる大学でドイツ語の教授をつとめ、そして詩を書きます。わたしはまたロランの『愛と死との戯れ』および『時は来たらん』を翻訳して出版しました。（ここに挙げたあとのほうの偉大な作品は、いつもわたしにあの「気高い理想主義者<sup>イデアリスチッシュ</sup>」を思い出させます。）この10年くらいというもの、わたしにとってロランの人間的な作品は、パンと日光のように無くてはならぬものになりました。ロランはわたしにとって慰めであり光です。わたしは彼のうちに父と友を、精神と愛を、理想と信仰を見出します。わたしは彼のうちに音楽と建築を尊敬します。わたしは彼のうちにもっとも人間的な兄弟と、至高の世界への靈感にみちた案内

者を見出します。5年か6年前、わたしはロランの伝記を知ろうと思いました。そしてその頃、或る日のこと、東京の一軒のドイツ書籍店でシュテファン・ツヴァイクの『ロラン伝』を見つけました。わたしは大喜びでそれに読み耽りました。この時はじめてわたしは、70歳の銀髪の「気高い理想主義者」と真摯で天才的な若いフランス人との、あのように美しく、精彩ある友情について知ることができたのです。それ以来わたしは、マイゼンブークのあの聡明な母性愛にみちた、高貴、明澄、闊達な形姿をけっして忘れることはできません。それはわたしのなかで日、一日とより輝かしく、より尊いものになりました。それから間もなくわたしはあなたのあのように感動的で、あのように敬虔な『マイゼンブーク伝\*』をふかい喜びをもって読み、消えがたい感銘をおぼえました。ロマン・ロランに宛てたわたしの最初の手紙——それは1925年の春に書いたものですが、このなかでわたしはあなたの書物にたいする感激、またマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークの高貴、豊穡な人格にたいする非常な敬意を語ったのでした。ちょうどその頃、ロランは彼の告白の書『内面の旅路』のなかの一章を書きました。それは「ロラン年鑑」のなかに発表されている一章\*\*です。わたしに宛てた手紙のなかでもロランはあなたの伝記にたいする心からの賛辞を述べ、そして彼の「第二の母」に捧げられた深い愛について語ってくれました。

あなたが『<sup>†</sup>太初に愛ありき』として出版されたマルヴィーダの手紙！ 真に人間的な偉大な心の、何という貴重な実例！ いたるところに神聖にして厳肅なものまで鍛えられた愛と、数々の試練と悲哀によって浄められた善意が感じられます。それが暖かい励ましとなって、来たるべき人類を高貴な孤独のうちに、たえず祝福するのです。母親のような彼女の微笑のまわりには、すでに何か永遠なものが、ほのかな、金色に輝く霧のように漂っています。これはまことに全人類にとって必要な書物であり、人間を内部から高め、より人間的にする書物です。これらの手紙を生かしているものは、得もいわず私たちに勇気づけ、いよいよ厳肅な幸福を味わせてくれます。わたしにとってこの書物は、もっとも自由な意味における教訓書です。わたしが無力で、信仰をなくし、絶望する時には、いつもわたしは魅惑的なこれらのページから、自由な魂への信仰と実りゆたかな人間性への確証を汲むことで

しょう。——ここにわたしは心からあなたに感謝いたします、わたしのよき友よ！

わたしの国には今なおさまさまの偏見や狹隘な国粹主義や浅薄さや、その他、過去のさまさまの亡霊がはびこっています。政治家は彼らの卑俗な詭弁を事としています。文壇という「広場の市」は偉大さを欠いた享楽欲だけを歌っています。自由な魂をつねに唯一の女主人として聖化し、そしてその宥和的な声をできる限りこの世に実現しようと努める少数の人びとは、いずれの国でも同様ですが、ここでも必然的にどの党派にも属することなく、孤独な道を歩まねばなりません。非常にしばしばわたしは、マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークがあの崇高な「告別のことは\*\*\*」のなかで予言的に現わした、愛と平和の「目に見えぬ教会」という気高い理念を思い起こします。

愛する友にして姉妹！わたしは、マルヴィーダの精神を形ある光として全人類に贈ったあなたの著作、また贈るであろうあなたの著作を心から賛嘆し、尊敬します。全人類はそれを神の導きの松明として守護しなければなりません。わたしたちがこれほど感謝するあなたの著作に祝福あらんことを！

わたしは多分来春にはヨーロッパに参ります。もしあなたのところに伺って、マルヴィーダの思い出に溢れるあなたの目と口から、あの気高い精神のやさしくて力強い光を汲み取ることができるなら、わたしの心はどれほど喜びにみち、熱い涙にふるえることでしょう。そしてまた、ロラン、ローニガー〔作家・出版者。『ロマン・ロランの友らの書』を編集〕その他のヨーロッパの兄弟たちに会って語るすることができるなら、それは何という大きな喜びでしょう！わたしたちのよきローニガーの著作と目論見をわたしは心から賛嘆し、尊敬します。——彼を手助けすることが出来ないことを恥ずかしく思うのですが。

もしオルガ・モノー夫人にお会いになるか、それともお便りされることがあれば、どうかくれぐれもよろしくお伝え下さい。

いま四月の美しくおだやかな夕暮がやって来ます。新緑の梢のうえに浮かぶ、バラ色がかかった黄金の雲は次第に濃くなり、無言のうちに紫色に変わってゆきます。わたしの小さな庭では、青味がかかった夕闇のなかで、吹き出した微風にスイセンの



淡黄の頭が揺れています。

敬愛する、はるかな友にして姉妹なる人よ！ あなたの<sup>お</sup>ゆらぬ健康をお祈りします。そして、あなたのこれまでのご親切なお手紙とマルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク書簡集にたいし幾重にもお礼申しあげます。

あなたに忠実な

片山敏彦

この手紙に同封して、わたしたち夫婦の写真を二枚、心からの挨拶とともにお送りします。

#### 注

\* 1916年、マルヴィーダ生誕百年を記念して出版

\*\* 「愛・平和・Amore・Pace」の章。

\*\*\* 回想録『生涯の夕暮』の最後の二章。

ミュンヘン、フリードリヒ通り

1928年9月14日

敬愛する、はるかな友！

わたしの傍らには7月27日付けのあなたの親切なお手紙と、太平洋の南岸の美しい絵ハガキがあります。皆あなたのご好意の印しです。わたしは非常にうれしく思いました。あつくお礼申しあげる次第です。わたしが味わった大きな損失にたいしあなたが示された暖かい、理解にとんだ関心はほんとうにわたしの慰めとなります。わたしがあなたの最初のお手紙を——愛する父が息を引きとった部屋で読んだ時のあの心の奥底にせまる荘重、厳肅な感動をわたしは決して忘れないでしょう。父はまことに安らかな表情を浮かべて横たわっていました。わたしは前の晩、一睡もしませんでした。心配された別れがやってきたのです。——そしてちょうどそこへお手紙がやって来ました、一つの大きな慰めのように！ それはわたしをマルヴィー

ダの世界——わたしがわたしである世界につれ戻し、そして、わたしの仕事はるか東方でも数名の友を見出したことを親切にも告げてくれたのです。あなたは又、マルヴィーダにかんするわたしの論文『愛と平和』を翻訳し、『東方』に発表するという知らせで、わたしに大きな喜びを与えてくれました。マルヴィーダが若い日本の魂——この偉大な理想主義者イデアリスティンを理解し、愛するであろう若い日本の魂に語りかけることを思うと、わたしは嬉しくてなりません。

あなたの友人の尾崎の署名もあるおハガキをいただいた時、ちょうどわたしの母とわたしはミュンヘンを離れ、近くのバイエルンの山地に行っておりました。わたしたちがいた小さな村(レンググリース)の絵ハガキを数枚ここに同封します。そのうちの書かれた一枚は、わたしの心からの挨拶とともに、あなたの友人の尾崎に渡して下さい。この小さな村ではわたしたちは自然だけを相手に暮らしました——森と牧草地、山と川。もしあなたが来年ミュンヘンにお出でになれば、わたしは喜んでこの快適な場所にご案内しましょう。そこはすぐ行けます——(汽車で一時間半です)。村そのものも非常に美しく、その一軒、一軒が別々に彩色されています。しかし今はまた、わたしたちは大都会の落ち着かぬ生活をつづけております。

この手紙と同時に、医者であり、哲学者であり、すぐれたバッハ研究者でもあるアルベルト・シュヴァイツァー博士の最近のパンフレットをお送りします。このなかで彼はアフリカにおける彼の献身的な活動を——彼の人柄全体がそうであるように！——淡々と語っています。シュヴァイツァーは現代における最も偉大な、とくに最も高貴な人間のひとりです。彼はまたわたしたちの偉大なロマン・ロランの友人でもあるのです。この二人を識ることは、わたしたちの生の価値を高める、一つの深い喜びです。

それではこの手紙とパンフレットが無事にあなたの手に渡りますように。あなたとあなたの奥様に、母とわたしは心からの挨拶をお送りします。

よき思いをこめて

あなたのはるかな友

ベルタ・シュライヘア

東京府下

1928年10月7日

わたしの敬愛する、ミュンヘンの友！

9月14日のお手紙、無事に届きました。わたしの喜びは言うまでもなく、ほんとうに心あたたまる思いです。あつくお礼申し上げます。レンググリースの四枚の絵ハガキは大へん美しく、あなたの国の自然がもつ、厳肅でしかも童話のように無垢、単純な魂をしみじみと語ってくれます。そしてこれらの絵ハガキの一枚は、デューラーの或る水彩画をよく連想させます（わたしは複製でしか知りませんが、たいへん気に入っています）。そしてわたしは、天才的な芸術家の生ける創造形式が、彼をとりまく自然に内在してその自然のなかに発現する形式にまったく近いことをあらためて感じます。—— 来春、あなたと共にそこに立ち、すがすがしい静かな大気を吸い、山と川と牧草地と森を楽しみ、そしてこれらと暮すことができるとは！

親切にお送り下さったアルベルト・シュヴァイツァーのパンフレットにたいしても衷心からお礼申し上げます、はるかな友よ！ 一昨日それを受け取りましたが、わたしにとっては非常なよろこびです。

わたしはこの夏に故郷でシュヴァイツァーの『文化と倫論』を読みました。この書物から受ける感銘は多くのアカデミックな倫理学のそれとは随分ちがったものです。その一ページ一ページが著者の偉大な魂がもつ真摯で透徹した体験力にみちています。実際この書物は「生そのものにたいする」わたしたちの畏敬の念をたかめます。もしわたしがこの偉大な気高い人格をよりよく、より深く識ることができるなら、それは必ずやわたしにとって大きな喜びとなるでしょう。アルベルト・シュヴァイツァーは最大の「教養」人のひとりです。そうではないでしょうか？—— つまり、マルヴィーダが彼女の回想録の第三版への序言（1881年12月、ローマ）で、すぐれた英知をもって語っているあの意味においてです。その序文をわたしは感激をあらたにして読んでいます。—— あなたがマルヴィーダの最後の崇高な日々について書かれた例の立派な論文を日本語に訳し、これを若い日本に贈ることは、わたしのいとも喜ばしい義務です。この翻訳がわたしたちのささやかな、しかし心のかよった雑誌「東方」に発表されれば、すぐにそれをお見せします。

わたしたちのよき友 A・アルバース<sup>[ミュンヘンのベック書店の編  
集長。のちナチ政権下で自殺]</sup>がこの夏に便りをくれ、  
天才的・悲劇的なヴォルフガング・グレーザー<sup>[21歳で自殺した  
文筆家・音楽家]</sup>について彼が書いた  
小論をわざわざ同封してくれました。わたしは深く感動しました。心からアル  
バースとその友情に感謝します。数日中に彼に手紙を書くつもりです。

先日、わたしたちのロマン・ロランの手紙<sup>\*</sup>に次のような忘れがたい言葉が書か  
れていました。「……けれどもわれわれはあくまで自己を守りぬきましょう。荒れ  
る大洋の上には、最大の神である至高の精神の明せきなまなざしが、見おろしてい  
ます。そのまなざしは最後には、勝利を得るでしょう。」(… Mais, nous, restons  
maîtres de notre moi! Il est le regard clair du plus grand Dieu, de l'Esprit  
souverain, qui plane sur l'Océan soulevé! Il aura le dernier mot.)

この気高い、励ましにみちた数行は、混乱した現代にあっては、わたしたちが共  
にする太古の故郷からの鐘のように響きます。そうではないでしょうか、敬愛する、  
マルヴィーダの友!?

この秋の数日は太陽の金色と霧の灰色で織り合わされています — ちょうど人間  
の心における希望と憂愁のように。いつもお達者で仕事にはげんで下さい。わたし  
の妻とわたしから、あなたとあなたのお母様に、感謝にみちた多くの挨拶をお送り  
します。

もっともよき思いをこめて

あなたの忠実な

片山敏彦

#### 注

1928年6月15日付。訳文は『ロマン・ロラン全集』35、74頁による。

ヴェルサイユ、ヴィラ・アミエルにて

1928年11月19日

愛する、はるかな友!

この度のわたしの挨拶は、マルヴィーダが10年間も毎夏と毎秋を過ごし、そして1889年の秋はじめてロマン・ロランに会ったその家から — つまり、エコール・ノルマルでのロランの師、ガブリエル・モノーの家であるヴィラ・アミエルから、あなたのところへ届きます。

オルガ・モノーがわたしの母親のようなよき女友だちであること、そしてわたしがこれまで何度か、長い間、彼女と一緒に暮らしたことをあなたにご存知です。今回は彼女が夏のあいだ姉のナターリエ・ヘルツェンの許ですごした、レマン湖(ローザンヌ)まで迎えにゆき、彼女と一緒にここへ来ました。あなたとあなたの友人の尾崎に宛てた絵ハガキはもう手にされたことと思います。わたしがヴィルヌーヴを訪れた午後、どれほどわたしはお二人のことを考えたことでしょう!

あなたは『友らの書』のなかで美しくも、「ロランはわれわれにとって時間・空間の限界の克服者である」と述べています。このことをわたしはあの午後ひしひしと感じました。わたしたちのロマン・ロランにたいする敬虔な尊敬の念がすべての距離を超えて人間を結びつけます。

わたしがあの美しい道をモントルーから — ロマンティックなシヨンの城館を通りすぎて — ヴィルヌーヴへと赴くとき、それはいつも巡礼のようです。その時々周囲の情調がどうであれ、そのなかにわたしは常にあの素晴らしい地上の一角を感じとりました — 青々とした夏空に照る陽光のなかに、ちかくの山々に懸かった薄い霧のヴェールのなかに、そしてまた、まるで眼のシンフォニーのように山腹の森を金と紫に染める秋の輝かしい色彩のなかに。しかし心のなかを支配する情調はいつも同じものでした。あつい感謝とふかい感動とがそれで、この二つをあなたもわたしと共によく味わって下さることでしよう。

わたしにとってヴィラ・オルガは安らぎのオアシスです。えもいわれず快い静寂と大きな平和がこの建物全体のうえに憩っています。とはいえ、どれほどの戦いが

この平和に先立ってあったことでしょう！ それ故にこそこの平和はわたしたちをこのように感動させるのです！

マルヴィーダは、いつもわたしたちの対話の偉大なライト・モチーフです。彼女がわたしをロマン・ロランのところへ導いたのです。彼女がなければわたしは決してロラン個人に近づくことは敢えてしなかったでしょう。彼女はロランの青年時代の気高い守護者でした。そして彼女はわたしの人生の中心です。それであなたには想像がおつきでしょう——ロランのうちにマルヴィーダの世界をふたたび見出し、彼女の本質の反映を彼の本質のなかに感じ、あの偉大な理想主義者<sup>イデオロギスト</sup>の精神的息子として彼に呼びかけることが、わたしにとって何を意味するか。マルヴィーダはロランのなかに生きつづけました。彼女は彼のなかで、彼をとおして、わたしたちの時代に、すべての時代に働きかけます。

そして音楽！ わたしたちが一緒になった時の第二のライト・モチーフはこれです。この偉大な友が演奏するのを聞いたのはただの一度しかありません。しかし対話には音楽が何度でも現われます。それからわたしたちの共通の友、アルベルト・シュヴァイツァー！ こういったすべてのものには、午後の数時間はあまりにも少なすぎます。それでも、この心やさしい友が仕事の多忙と疲労のなかでこれらの時間を割いてくれる時、わたしたちはどれほど感謝せねばならぬでしょう！

これらの時間の厳肅な喜びは消えることはありません。それは心のなかに静かな力として留まり、その力はわたしたちが何をする場合にも働きます。

ほんとうに心からわたしは、あなたと友人の尾崎とに、1929年にヴィルヌーヴへの道が可能となることを願います。わたしはあなたのために今からそれを楽しみにしています！

ここで10月7日のお手紙と、それから絵ハガキにたいしあつくお礼申しあげます。あなたがわたしの国の自然について言われたことは、わたしには非常にうれしいことでした。来春にはあなたにこの美しい地方をお見せできればと思います——山間のさわやかな流れ、気持のよい牧草地、森、独得の風情をもつ大きな村、そして背景をなす山々。

しかし次にはミュンヘンも。ミュンヘンはすべての外国人に愛されます。その美

術館、音楽、魅惑的なロココ劇場。ただ、わたしはミュンヘンに暮らしてはいますが、気持のうえでは都会人ではありません。わたしには自然——その平安と美のほうはずっと強く訴えます。

あなたに宛てたロマン・ロランの手紙から、あの雄々しい励ましの言葉を抜き書きして下さったことに感謝します——「けれどもわれわれはあくまで自己を守りぬきましょう、云々」。よき種蒔き人あかきのように彼はこのような金言をわたしたちに蒔いてくれます。それがはるか東方のあなたのところに届き、そしてわたしのところへ戻ってきました。わたしはそれを心のなかにしまっておき、いつも疑惑と落胆の時にはそれを考えることにします。

この間またアルベルト・シュヴァイツァー博士に会うことができ、その二度のオルガン演奏会を聴きました。もしミュンヘンへいらしたら、彼について沢山のものをお見せし、またお話ししましょう。彼やロマン・ロランのような人物が現代に生きて活動しているのを見るのは、悲しいこと苦しいことが多いなかであって、一つの慰めです。

当地ではわたしはマルヴィーダの雰囲気あまのなかに浸りきっています。すべてのものがわたしに彼女のことを思い出させます。ことにわたしはレーンバッハが彼女を描いた、あの簡素ながら印象ぶかい肖像画を毎日ながめています。それはローマでのことで、当時レーンバッハは次のように言ったのでした——「この小柄な女性のなかには一人の偉大な賢者の魂がひそんでいる。その魂をわたしは描かねばならない。」

彼はマルヴィーダのすべてをこの絵のなかに込めはしませんでした。わたしはここに彼女の精神と彼女の飾り気なさだけを見出します。あの限りない善意はここには十分に表現されていません。それでもこの絵は見事なものです。わたしたちはこの絵を何度も何度も眺めると、マルヴィーダと口をきくような気がします。偉大な愛するマルヴィーダとわたしの結びつきはいよいよ堅く、深いものになります。どうか『東方』の、あの論文の翻訳がのった号を送って下さい。それを判読することができなくても、その翻訳をもっていることは一つの喜びです。そしてその号をロマン・ロランにも送って下さい！——

オルガ・モノー夫人がくれぐれもよろしくとのことです。彼女はわたしたちがマルヴィーダを共有していることを喜んでいます。

当地にどれくらい滞在するか、まったく分かりません。どうかお手紙はいつもミュンヘンのほうへ宛てて下さい。すべて母がこちらへ転送してくれますから。

ひょっとして東京大学のシュテルンベルク (Sternberg) という教授をご存知でしょうか？ ローザンヌのわたしの友人であるヘルツェン家の人びとが先日この名前をいっていました。

では、あなたに——そして奥様とあなたのロマン・ロランの友たちにも、裏心から挨拶をお送りします。

よき忠実な思いをこめて

あなたの友、ベルタ・シュライヘア

1928年11月20日

東京府下

わたしの敬愛する友！

今朝、11月3日付のローザンヌからのお便り、まことに有難く、また嬉しくいただきました。あなたが愛する偉大な友——同胞に再会されたヴィルヌーヴの素晴らしい写真にたいしても、お礼申しあげます。そうです、わたしのよき友！ わたしにもロランと共にする時間が何を意味するかよく分かります。彼は最近どうしているのでしょうか？ 哀れな「こわれた胸」(poitrine brisé)について彼自身が書いて寄こしたことは、わたしたちを非常に不安にしました。あなたがお会いになった時、もうすっかり直っていたでしょうか？ あまりに多くの仕事のため疲労がみられないでしょうか？

あなたが尾崎〔喜八〕に宛てられた絵ハガキはすぐ彼のほうへ送ります。彼はどれほど喜び、感動することでしょう！ そして彼はあなたにお便りすることでしょう。

もう数日前に、あなたの美しい論文「愛と平和」をわたしが翻訳したものが載っ



ている、わたしたちのささやかな雑誌『東方』を三部お送りしました。

この論文はわたしの友人たちをふかく感動させ、魅了しました。マルヴィーダは生涯いつもそうでしたが、いまこの国においても、向上しようとする若い魂たちを鼓舞する偉大な導き手となり、友となるだろうことを思うのは、わたしの喜びです。

この数日の、わたしたちを取りまく晩秋の自然は神々しいまでに美しいです。今日、雨ののちの空は青く澄みきっています。木々の葉は荘重な安らぎのうちに、彼らの成就した濃い黄金色の夢を夢みています。そして何枚もの葉がなんと静かに、喜ばしい諦めのうちに、母なる大地に向かって落ちてゆくことでしょう！

わたしの愛する、よきシュライヘア！ それではもう一度わたしの感謝を受けて下さい。あなたが約束された、ヴェルサイユからのお便りをわたしは楽しみに待っています。

わたしの妻、知子からも感謝にみちた多くの挨拶を！

あなたのはるかな忠実な友

片山敏彦

11月24日の夕べ、「マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークとロマン・ロラン」と題して、短い講演をします。

東京、杉並

1955年3月27日

敬愛する、マルヴィーダの友！

新しい春の陽光のうちに心からの挨拶をお送ります。

あなたが先日ミュンヘンで、「ジャン・クリストフ・センター」建設のことでどれほど深い喜びを味わわれたかを思うと、わたしは嬉しくてなりません。南大路氏がゲッティンゲンからあなたのいつもお元気なことを知らせてくれました。ミュンヘンでは、ミンダー教授に再会されましたか？ 心から期待されている、貴重なお仕

事——『ロラン＝マルヴィーダ往復書簡集』はどうなっていますか？

わたしはやっと『ジャン・クリストフ』の翻訳を仕上げました。わたしにとっては言葉につくせぬほど大きな体験で、その余韻はわたしのなかに、マルヴィーダのあのアダージョのような神的・人間的な言葉として今なお響いています。

昨夏、サイゴンにいるガブリエル・モノー教授が休暇を利用して日本へ来ました。ただ東京での滞在はあまりにも短かすぎました。彼は1954年7月10日の手紙で次のように書いております、「わたしの祖母が一年半前に103歳で亡くなった、あのヴィラ・アミエルにいらっしやったことを思うと、わたしは快い、そして深い感動をおぼえます。マルヴィーダはわたしの最初の記憶の一つです……」

わたしは一度、彼を訪問し、わたしたちはマルヴィーダ、オルガ・モノー夫人、ロラン、そしてあなたのことを話合いました。その時わたしは、モノー教授がインドの偉大な思想家オーロピンドについて非常に美しい論文を書いていることを知りました。彼はオーロピンドの友人です。彼の上品な顔はいまは亡き祖母を思い出させます。

「原始林のドクター」のことをわたしはいつも深い敬意をもって考えます。そして地上のあらゆる民族が賢明にも、慰めと希望として彼を賛美するのをみて心から嬉しく思います。

来月になると南大路氏がレンググリースのあなたのところへ伺うそうですね。ああ、わたしもそこに居合わせることができれば、どれほどいいでしょう！ マルヴィーダとシュヴァイツァーの魂、それにオリヴィエとクリストフの尊敬すべき父の魂といつも暖かく結びついたあなたのお住居の貴い霊的＝精神的な雰囲気のなかに！——南大路氏は京都のひじょうに古い家柄で、「日本ロマン・ロランの友の会」のメンバーです。わたしは京都と東京で二、三度会い、それから彼のレッシングについての論文を読んだことがあります、これは好感のもてるものでした。

戦後の混乱にわたしは随分苦しみました、それでも——有難いことに——今はわたしもわたしの家族も元気にすごしています。二人の子供はそれほど音

楽的才能があるとは思えませんが、音楽がいよいよ好きになり、近頃ではバッハ、ヘンデル、モーツァルト、ベートーヴェンの小曲を楽しくピアノで練習しています。

先日わたしの小さな書物『ロマン・ロラン』と、わたしが翻訳したゲーテの『タウリス島のイフィゲーニエ』と『詩集』が再版されました。

敬愛する、マルヴィーダの友——わたしはあなたの高貴な志操と深い調和にみち、しかもあのように簡潔な『マルヴィーダ』（『偉大な亀鑑たち』の一冊）を日本語に訳してみたいと思います。もしあなたの許可がえられるとすれば、その翻訳はどんな条件で東京で出版してよいでしょうか？ そのための出版社は見つかるだろうと思います。

復活祭を間近かにして、今あなたのまわりには春の風光が日毎に明るさを加えているに違いありません。花と音楽があなたの生活と仕事と健康にたいする喜ばしい使者でありますように！

あなたの

片山敏彦

今ちょうどヘルムート・ヴォッケ教授の『ヘルダーレーンのキリスト教的遺産』を読んでいます、これはひとを感激させる名著です。これについてわたしは彼にいちど深い感謝の念を述べたいと思います。

#### 注

- \* 1955年3月、独仏の文化交流のために、ミュンヘン大学でソルボンヌ大学の教授団が一週間にわたって学術講演をした。この時ロラン夫人も同道し、ヴェズレーのロランの住居に隣接して「ジャン・クリストフのセンター」(Centre Jean Christophe) 建設のプランを発表した。

1955年6月18日

Grüß Gott (今日は!), 敬愛するマルヴィーダの友! お約束した手紙を書くのが、はじめ予定していたよりずっと遅くなってしまいました。いまわたしは豊かな体験にみちた旅をすませて来ました — 本来それはアルベルト・シュヴァイツァー、マルヴィーダ、ロランの旅です! といいますのは、わたしはこの三人のいわば客となったのです。(ギュンスバッハ、ヴェルサイユ、ヴェズレー) — このうち二人はもはやこの世にはいず、また一人ははるかな原始林の病院で働いているのです! ギュンスバッハからのわたしたちの手紙で、エンミー・マルティン夫人とわたしが二人してあなたのことを考えたことがお分かりです。あなたはギュンスバッハへの不思議な魅力をご存知です — 世間を遠く離れた、美しい自然のなかの小村。それでいて広い世界に向かってここから光が放射し、結合の糸がのびてゆくのです。この家に照会、挨拶、贈物を送らない国はこの地上でほとんどありません。そして殊にあなたの国はシュヴァイツァーの仕事と堅く結びついています。東京の村山サナトリウムの院長の野村実博士が昨年ランバレーネで働いたことは、きっとあなたもご存知でしょう。そして仙台の会津伸教授は日本でシュヴァイツァーにかんする講演をしています。

ギュンスバッハではわたしはいつものように「日本の間」に寝泊りしました。これは、かつて内村鑑三がこの家のために書いた、大きな額縁に入った日本語の箴言(それはベッドの上にかかっています)のためにこう名付けられたものです。それはドイツ語になおすと Gott ist die Liebe (神は愛なり)となります。

ギュンスバッハからヴェルサイユのヴィラ・オルガへ — これはあなたがよくご存知です。このヴィラも淋しくなりました。まず1953年にはオルガ・モノーニヘルツェンが102歳と6カ月の高齢で亡くなりました。そしてこの一月には彼女の婿のシャルル・リスト教授が亡くなりました。こうして、「偉大な歴史的過去」の家(シュテファン・ツヴァイクは、かつてヴィラ・アミエルをこう呼びました)に住んでいるのは、オルガ・モノーニヘルツェンの姉嬢[リスト夫人]だけになりました。あなたはわたしがオルガ・モノーニヘルツェンの娘(二人います)ととても親しくし

ていることはご存知です。わたしたちはレーンバツハによるマルヴィーダのあのバステル肖像がかかっている小さな部屋によく一緒におりました。それから毎晩、素晴らしいレコードでベートーヴェンの世界に浸りました。最後の四つのピアノ奏鳴曲と一群の偉大な弦楽四重奏！ わたしたちは小さなスコアを一緒に読みながら聴きましたが、ことに「病癒えたる者が神に捧げる感謝の歌」をもつ作品132が何回でも取り上げられました。パリへはよく行く機会があり、ミンダー教授も訪問しました。彼はあなたによろしく言っています。彼はいまゾルボンスで講義をしており、「ジャン・クリストフのセンター」の運営委員会のメンバーでもあります。

それからヴェズレーの体験がやってきました。ロラン夫人がわたしを何日間もそこへ連れて行ってくれたのです。何もかも期待した以上に美しいでした！ わたしは新しい印象のかずかず、偉大な歴史的時期（12世紀）の追憶にみちた情調、それからロマン・ロランの家の雰囲気のことごとく吸収しました。わたしは統一性をこれほど純粋に、調和的に保ってきた場所をほとんど他に知りません。ひょっとするとアシジがそうでしょう。しかしヴェズレーのほうが規模が大きく、また通俗化していません。あの見事な大聖堂——高貴な簡素さをもつ内部はなんと荘重なことでしょう！ それから古い外壁にそって小さな町全体をとりまく巡警路（Chemin de ronde）！ 古い灰色の石と石のあいだから、春のいま、赤い花が萌え出していました。灰色、赤色、そしてそれにキツタの緑色と、何という美しい色彩だったでしょう！ そして大聖堂のそばの高い段丘にそびえる年古りた菩提樹の巨木の下にたたずむ時、そこにはブルゴーニュの調和にとんだ風景がはるか彼方まで広がります。それは忘れたい眺めです。そして今はこの一帯を知るための素晴らしい時期でもあったのです。いたるところに金クサリとアカシアとエニシダが咲き薫っていました。——そしてロマン・ロランの家の内部では！ 彼がここを最後の住居とし、ここで記念碑的なベートーヴェン研究を完了したことを考えると、わたしは何ともいえぬ感動をおぼえました。そして部屋部屋にはヴィルヌーヴ以来なじみのある幾多の品をふたたび見出して、わたしは感慨ふかいものがありました。二度わたしたちはクラムシーと、それからブレーヴへも行き、ロランの幼年時代にあのように大きな役割を演じた祖父母の家を訪れました。わたしたちは煙で真黒になった暖炉のある古風な

台所に腰掛けました。すべてロランの幼年時代のままです！ ブレーヴのひっそりした小さな墓地！ 気持ちのよい自然のただ中にあるこの墓地は、どれほどわたしたちの偉大な友にふさわしいことでしょうか！ 彼の墓のかたわらでわたしは、彼のおかげでわたしたちすべての人生の一部となった美しいもの一切にたいし、静かに心の中で感謝を捧げました——そしてその際、日本にいる彼の忠実な友人たちのことを考えました。

わたしはヴェズレーでの何日かの中に丸一年の実りを収穫したような気がします。そしてヴェズレーを去る際には、素晴らしい意味を持つ遍路を終えて故郷に帰る巡礼者のような心地でした。

愛するマルヴィーダの友よ、あなたを失望させることが一つあります。わたしはロランとマルヴィーダの書信編集にかんする委任をことわったのです——断腸の思いで！ しかしわたしはこの任務に伴う責任がどれほどのものかを感じます。それは力と時間のすべてを集中しなければならぬ仕事です。そして今のわたしには、これが23年まえのように出来ないのです！

あなたが『ジャン・クリストフ』にかんする任務を終えられたと聞き、わたしは心からあなたのために嬉しく思います。あれほど敬愛する詩人かつ友人の作品にたいする奉仕を果たされ、あなたは何と仕合せでしょう！ あなたがマルヴィーダについてのわたしの小さな書物（「偉大な亀鑑たち」の一冊）を日本語に訳そうとされるなら、それはわたしにとって大きな喜びとなるでしょう。わたしは、あれ以来破産したアルスター書店に条件のことを問い合わせました。同書店の現在の収益管理人であるハルムス博士はそれにたいし、百マルクの謝礼を提案して来ました——半分は著者に、半分はハルムス博士に支払うということで。あなた乃至あなたの出版者がこの条件をどう思うかを知らせて下さい。ハルムス博士のくわしい住所が必要でしょうか？

あなたはヘルムート・ヴォッケ博士（ウェストファーレン州のパート・エーンハウゼン、アルベルト・ルッシュ通り18番地）にもう便りを出されたでしょうか？最近、彼はひじょうな病苦に悩んでいます。遠国からの激励の声は、彼にとってきつと深い喜びとなるでしょう。

あなたのお仕事と、ご家庭と、健康に幸いあることを心から願いつつ

よき思いをこめて

あなたのベルタ・シュライヘア

(南大路振一 訳)

### 仏独合作テレビ映画

### 《ジャン・クリストフ》の周辺から

宮本エイ子

ある日のこと、わたしたちの古い友人、石田喜枝子女史からお便りをいただきました。「ラジオで聞いた事ですが、フランスでは、『ジャン・クリストフ』がベストセラーになっているそうです。テレビの影響というのは日本ばかりではなくフランスでもどこの国でも同じようです。今日では世界的現象となっているようですね……」

『ジャン・クリストフ』がテレビで放映されたのです。

石田喜枝子女史といえば古いロマン・ロラン友の会会員の方ならご存じだろうと思います。彼女は大阪の友の会を長くお世話下さった方です。又戦前から、瀧川幸辰先生の秘書として日常生活でも瀧川家の家族と親交をもたれ現在は大阪家裁調停委員をしておられます。このたびの第3次ロマン・ロラン全集刊行パンフレットも彼女に負うところが大きかったとみすず書房の編集部の方がもらされました。

(Cahier de la quinzaine)

ご承知のように『ジャン・クリストフ』は(1904-1912)、カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ、17巻を占めた大河小説ですが、全ヨーロッパに話題を投げ日本はもちろん30余国の外国語に翻訳出版されていますが、それらの国々で映画化されたかどうか定かではありませんが、70年を経、やっと今日、本国フランスで実現されたというよりむしろ70年経ても実現されうる事に深い意義を感じております。

ロランがその序文で「満々と水をたたえて流れゆく大河のごとく、いかに不動に

みえるときといえども絶えず発展変化をとげてとどまることを知らない」と述べているようにその構想、文体は一大叙事詩であり、創造的芸術家クリストフの生涯から人生の種々の問題に触れ勇気を起させ、いかに生きるかと高貴に語りかけるこの膨大なテーマは映画化を極端に困難にさせた要因でした。

今回のテレビ映画は見ることはもとより資料も手許にありませんが、ただ「今週のテレビ案内」を垣間見ながら誠に不完全ながら御紹介要約させていただく事をお許し願いたいと思います。

1966年、ロマン・ロラン生誕百年を記念し成功したラジオドラマ《ジャン・クリストフ》の脚本——クロード・ムールト氏による——をもとにフランソワ・ヴィリエ氏<sup>①</sup>が4年の準備期間、歳月をかけてプロデュースしたものです。音楽はブルノ・リグウトとジャン・ルイ・フローレンツ、舞台装置はジャン・シュル・バックとゲオルグ・アットフルネルです。

舞台に関していえばもちろんライン川沿といたいところですが、今日もはや当時のライン川はなく工場が立ち並び町は煤煙で曇り川は汚濁しているため撮影はダニユーヴ河岸に、ローザンヌも同様、当時の雰囲気<sup>(Danube)</sup>を極端にこわすためフリブールに<sup>(Lausanne)</sup>移して撮影がすすめられました。全所要時間、7時間半、9回シリーズ、フランス、ドイツ、スイスの夜のゴールデンアワーに同時上映。

200人の登場人物、4000人のエキストラ、そのうちの一人、主演のジャン・クリストフに扮するクラウス、マリア、ブランダウエル氏のプロフィールをのぞいてみる事に致しましょう。

彼は1945年生れのオーストリア人、ドイツ語を母国語とし、ピアニストとしても知られ五指に数えられる有名な舞台俳優——1970年以来、パリのコメディ・フランセーズにあたるウィーンのブルク劇場<sup>②</sup>の俳優——です。又、彼はミュンヘン、ハンブルグの劇場でハムレット等を演じたり、今回の《ジャン・クリストフ》のクランクインした時も自ら演じ監督する芝居のために昼夜、飛行機でハンブルグ、ウィーン、パリを往復するエネルギー的な人です。ドイツ圏で有名な俳優という条件の下で、ヴィリエ氏が彼に初めて会ったのは1976年。しかしこの時、フランス語のできないブランダウエルは<sup>24</sup>諾の即答をさけ、一日8時間、2ヶ月の特訓を得、セリフに支障のない事を見



定めてOK致しました。彼が俳優を志した時から容易ならざるものがあつた事が男性である彼の名前、<sup>マリア</sup>（聖母マリア・女子の洗礼名）にうかがい知る事ができましよう。今、私の脳裏を過ぎるのは「母は生涯私を産みつづけた」というロランの一見奇妙に響く言葉です。彼、クラウス・マリア・ブランダウエルにも父の猛反対をも征服した母の強い励ましと支えが「成功した暁には母の名を語ろう」……。母と息子の深い絆がここにもあつたのです。彼は今、《ジャン・クリストフ》をもって初めて世界の繪舞台パリへ踊り出たのです。「パリ！ それはフランスの都、否、世界の都であるかの地で演じられる事は役者冥利につきます。」と……〔家族・夫人と一人息子、趣味スキー〕

この映画上映をいち早く知らせて下さつたのは、関西日仏学館を建てるにあつて、詩人で、ロマン・ロランの学友、（ロランの死後、ロマン・ロラン友の会初代会長、ここでは、ロランとクロードルの関係を述べる事は省略。）で駐日仏大使、<sup>(Paul・Claudel)</sup>ポール・クロードルに京都九条山に同道し、のちに初代館長となつた地理学者、ル<sup>(Ruellan)</sup> <sup>(Claude Ruellan)</sup>エラン氏の令息、クロード・ルエラン氏でした。

蛇足になりますが、4年前、50年振りに京都を訪れ、愛くるしかつた5才のクロードが白髪混りの紳士となつて今は廃墟となつた九条山の旧日仏学館を住人であつた宮本正清の案内で訪れたのでした。50年の歳月はすべてを変えてしまいましたが、宮本がロマン・ロランひとすじに翻訳、研究している事を知つた彼は、早速こうして《ジャン・クリストフ》のテレビ案内の切り抜きを送つて下さつたのです。今一度彼の友情に深く感謝する次第です。

この事に先がける事一年前。すでにこの映画制作について知らせてきた人、それは、他ならぬロマン・ロラン未亡人でした。彼女は日本のNHKでも放映される事を強く希望しながら……。

(Jean・Pierre・Aumont)

- ① 1920年パリ生れ、ユダヤ系フランス人、兄に映画俳優のジャン・ピエール・オーモン、1948年から今日まで多くの長短篇映画、記録映画を手がけてきた。
- ② 1741年創設、オーストリア演劇の伝統を誇り、この舞台には多くの内外の有名なスター達が出演、かつてはオーストリア皇帝が初日には必ず臨席になつた格式ある劇場。

## 無償の愛

古田 泰子

一年前大学の面接で、最近読んだ本で感動したものと聞かれて、『ジャン・クリストフ』ですと答えたら、ではその中ででてくるオリヴィエの姉、アントワネットについてどう思うかと尋ねられた。咄嗟に私は「自分にも弟が一人いるが、とても彼女のような献身的な姉としての行為は考えられない。」と答えた。私はそれまで彼女については考えたことはなかったのである。『ジャン・クリストフ』を読んだ時は主人公クリストフの力強い生命に圧倒され、彼の魂の成長、精神の高さばかりに目を奪われていたと言える。質問されてみて、改めてアントワネットという女性の存在に気がつき、興味を持ったのである。

両親の不運の死と没落に会い、弟の養育に尽し25才という若さで死んでいく薄幸の女性。御嬢様育ちの柔らかな心の持ち主の彼女のどこに、生活を支えていく逞しきがあったのかと驚くばかりだ。弟への愛情のみに、自己の全部を犠牲的に捧げ尽くすこと、青春の若いあらゆる情熱が自己献身という型に転身させてしまうのである。またそれが生きる力を与えていると言える。

私は自己犠牲という生き方には批判的であった。彼女の生き方を否定したい一方で、どこかとても引きつけられるのである。現代の私たちはいつも自分のした行為への見返りを求める。これだけ与えるかわりにそれだけのものを返してほしい。いつもどこかで計算されている。でも彼女にはそれはない。自分には将来がなくても、弟が幸福であれば良いという無償の愛情である。真の愛情とはそんなものかもしれない。親子の愛、兄弟愛、男女の愛にしても、相手に代償を求めてするものではない、愛する人のためそうせずにはいられない、全ての利害を超越した所に存在する。彼女を一個の人間としてみるなら、自己を捨てた人だが、オリヴィエの姉としては愛情深い最高の女性だ。これは相容れない矛盾だと思っていた、が彼女は決して自己を捨てたのではない。愛するという行為に自己を没入させ、現実から逃避せず、生き続けた。だから、死ぬ時も後悔することもなく幸福だと言えたのだ。それは自

分の信念のままに生きた者だけの持てる満足感である。

永遠に告げることのない想いを胸にいただき、愛の言葉の悲しさをかみしめて一生をおくった彼女の姿は、またクリストフとは違った気高い、強い細流の流れをなしていると言えよう。

### ロマン・ロラン研究所から

ロマン・ロラン研究所が財団法人として発足してから、今年の3月末で早くも満9年を経過しました。近年の経済的環境はまことにきびしく、また研究所の生みの親であり育ての親でもあられる宮本理事長が昨年来病氣ご静養中ということもあって、所期の目的に沿った事業の実施・拡充も、それに必要な施設の資料等の整備も思うにまかせぬ難かしい事態が続いております。しかしながら、創立以来の中心的な継続事業の一環をなすロマン・ロラン・セミナーはいまや約80回を数え、内容的にもそれなりの成果を挙げてきましたし、また本誌「ユニテ」については、今年度も予定どおり2回の発行を維持することができました。これには、理事長以下関係者の盡力もさることながら、「友の会」の会員諸氏をはじめ、ロマン・ロランに心を寄せる方々のご援助に負うところが多大であり、ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも一層のご協力をお願いする次第です。

ところで、昨年11月、みすず書房によるロマン・ロラン全集新版42巻の刊行が開始されたことは、すでにご承知の向きも多いと思いますが、第5巻『コラ・ブルニョン他』を皮切りに、3月現在で5回の配本を終え、順調なすべり出しをみせています。さきの決定版35巻が完結してから13年余、未発表のものを含むロマン・ロランの全作品を網羅した上、日記・書簡・エッセーなど6～7巻分の新資料を加えて大巾に増補・改訂された今次全集の刊行は、まことに時宜をえた意義深い企画と言えましょう。旧版の全集がしだいに入手し難くなりはじめた数年前から、われわれは「セミナー」参加者など多くの読者の声を代弁し、折にふれロマン・ロラン

の著作の刊行を要望してきましただけに、それがこのような画期的な形で実現しつつありますことは大きなよこびであり、今後すくなくとも3年以上を要すると思われるこの全集刊行の事業が成功裡に完結しますよう、当研究所として能うかぎりの支援をつづけたいと思いますので、よろしくご協力をお願いします。

今年度も購入図書・受贈図書が若干——例えばV・E・バラホーノフ著『ロマン・ロランとその時代——初期——』（1972、ロシア語版）など——ありましたが、まだ未整理のものや入手途中のものもありますので、次号にまとめてお知らせすることにします。 （1980.3.31, S・H）

## 友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会例会は、現在までに通算254回をかぞえています。その活動状況は下記のとおりです。

1979年11月24日（土）

251回例会

第76回 ロマン・ロランセミナー

場 所 京大楽友会館

テーマ： ロマン・ロランと戦争 Ⅱ

『先駆者たち』より

「虐殺された民衆に」

発表者 特定せず一同で分けて読み、波多野先生が解説

出席者 20名

金権政治の侍婢たち、厚顔無恥なインテリ、余りにもローマ的な「教会」の政治的慎重さ、の中で、「不幸な民衆！ かれらより悲劇的な運命を想像することができるだろうか！……決して相

談はされず、つねに犠牲にされ、戦争に追いつめられ、断じて欲したのではない罪悪をしいられているのだ……」

ヨーロッパ文明の破綻が端的にあらわされているが、しかしロランの強い人類、人間性への信頼は、それでも尚平和を欲し確信し、ヨーロッパに代ってアジアが他の人々が世界を導くことを望んだのである、と伺い、私たちがそのロランの「信仰」に鼓舞される気がした。

1980年 1月26日(土)

252回例会

第77回 ロマン・ロランセミナー

場 所 京大楽友会館(今後、特に場所を記さない時は楽友会館で行われる)

テーマ: 「永遠のアンチゴネーに」

発表者 西村 太一

出席者 17名

ロラン生誕114年目を祝い、なごやかなムードの中で西村さんの発表が行われた。ギリシャ神話のオイディプス王の姉妹アンティゴネーから題名をとられたこの論文の中でロランは、憎しみを分けるのではなく愛を分ける、と生れついたアンティゴネーの精神を捉え、女性の中にある自覚されていない力、に気付かせようとした。母、マルヴィーダの二人を持った幸せなロランはその感謝をこめて、何を女性から享けたかを書き、戦争から未来を救うことへの願いを托した。

2月23日(土)

253回例会

第78回 ロマン・ロランセミナー

テーマ: ロマン・ロランと戦争 総括

発表者 共同討議

出席者 17名

ロランが生涯対決した課題が『戦争』である。戦争の勃発をどうしたら止めることができるか、それに対してさらに『革命』という問題がおこり、『戦争』と『革命』がロランの時代の大きな課題となった。

ロランは一体、戦争をどう考えていたのか？ 現実には現実として認めざるを得ない、起ってしまった戦争を個人の方で押し止める、などという幻想は抱いていない。しかし常に平和を望み、汚されても更に平和への可能性を追求してゆく、人類の夢想とロランが呼んだものを求めてゆくその姿勢がロランなのだ、と。もっと学習を重ねたいと切に願う。

3月22日(土)

254回例会

第79回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： 『闘争の15年』から

《精神の独立》をめぐるアンリ・バルビュスとの論争

発表者 岡田淳平

出席者 11名

暴力の問題と精神の力について、吾々の未来へ向けて何を守るべきか、破滅に陥らないために何を学ぶべきか、の大きな示唆を与えられたと思う。

結び

『ロランと戦争』という大きなテーマを掲げてこの一年セミナーで学んできたが、勿論、ロランの思想の一端に触れた、としか言えない。しかし第一次大戦中のロランの論説の一部を通して、ロランが破局的な情勢の中で知識人として何を学び、どう生きたかということ、吾々の現実と重ね合わせて学ぶ所は多かったと思われる。



## — 倫理と政治 —

丸山 真男

客観的正義に対する畏敬を持たず自己の上になんらの道徳律を認めない傲慢な政治権力は一時いかに隆盛を誇ろうとも必ず歴史の審判の前に潰え去ることは最近の世界におけるファシスト独裁国家の運命がなによりよく物語っています。「少数の人を永久に瞞すことは出来る。多数の人を一時瞞すことも出来る、しかし多数の人間を永久に瞞すことは出来ない」というリンカーンの言葉、或はまた、「目的は手段を神聖にするというのは正しくない。手段は真の進歩のためにはむしろ目的よりも重要だといえる。というのは目的というのは……人間相互の外部的な関係を変えるにとどまるが、手段の方は正義のリズムによるか暴力のリズムによるか、そのどちらかによって人間精神を形づくるからである。もし後者すなわち暴力によるとすれば、たとえどんな形態の政治であろうとも強者の弱者への抑圧をとどめえない。これこそ私が革命の時の方が平時よりも却って道徳的諸価値の擁護を必須と見做す所以である」というロマン・ロランの言葉はそれぞれ最も簡潔に最も美しく、政治における倫理的契機を表現したものといえましょう。現実の政治は一方の足を権力に、他方の足を倫理に下しつつ、その両極の不断の緊張の上に進展して行くのです。

— 『戦中と戦後の間』 (みすず書房) から —

## あ　と　が　き

この数年間というもの、『ユニテ』の読者にとって最も待たれる読みものであった南大路先生のロラン＝マルヴィーダ往復書簡が、とうとう完結しました。1974年の『ユニテ』2号からの連載なので、もうまる6年に亘って、ご多忙のなかを毎号快く原稿をいただくことができ、編集部としては本当にありがたく存じております。ここに改めて厚く御礼申し上げます。

この連載の完結を記念して、ベルタ・シュライヘアの同名の書物(みすず書房刊)からと、同じくみすず書房刊、片山敏彦著作集と雑誌“みすず”からシュライヘア・片山敏彦往復書簡を若干抜き出して編集してみました。シュライヘア女史は若き日の南大路先生がドイツ留学中に大変お世話になられたこともあり、マルヴィーダを語るとき忘れることのできない方です。ロランの縁につながる美しい魂の諧和が響いてくるのを感じていただけることでしょう。

宮本正清夫人から仏独合作テレビ映画の詳しいご紹介をいただきました。この壮大な大河小説の映画を茶の間で観ることができるかと期待し、日本でも是非近いうちに放映に漕ぎつけてほしいものとねがっております。

ユニテの広場の古田泰子さんは9号の囲み記事で紹介させていただいた、毎日新聞読書感想文コンクールで受賞された、初々しい京都女子大2年生、『ユニテ』のとりもつ縁でセミナーに参加されるようになりました。今後のご活躍を期待しております。

わたくしごとで恐縮ですが、今年2月末から家族が入院しておりました京都第一日赤病院第一内科で、主治医となって下さった妹尾次郎先生は、10数年前、宮本先生ご夫妻と共にロマン・ロラン巡礼の旅に参加されたという、非常に誠実な真摯な医師です。そして又、その病棟の看護婦長森野あき子さんは、25年も前からの熱心なロマン・ロランの友の会の会員で、毎号の『ユニテ』を愛読して下さっている方でした。偶然の、この思いもよらない出会いに恵まれ、心あたたまる入院生活をすごさせていただいただけましたのも、これまたひとえにロランの縁につながれたことと、



ユニテの輪の広がりをおぼえ、深い感銘を禁じませんでした。

セミナーでの“ロマン・ロランと戦争”の学習は一応終わりましたが、私たちの周囲の情勢はまことにきびしいようです。くりかえしロランの精神に学び直し、誤ることのない道を歩いていきたいものと念じております。

(編集部 相浦綾子)

## 投 稿 歓 迎

- ロマン・ロランの友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ枚数の制限はしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合で何回かに分けたり、適当に削ったりすることがありますので、ご承知ください。
- 原稿は必ず、400字詰、または200字詰の原稿用紙に横書きにして、ロマン・ロラン研究所あてにお送り下さい。
- 締切り日は特にもうけておりません。年2回発行を原則としておりますので、随時、お送り下さい。
- 原稿を掲載した方には、原稿料に代えて、当該「ユニテ」を3部贈呈いたします。

「ユニテ」 編 集 部

|     |  |
|-----|--|
|     | ユニテ 第3期 第11号   |
| 発行日 | 1980年3月31日   |
| 発行所 | 財団法人 ロマン・ロラン研究所<br>京都市左京区銀閣寺前町32<br>TEL (075) 771-3281 |
| 印刷所 | 昭和堂印刷所<br>京都市左京区百万遍交差点                                 |

- /RR/1/146/ Kramof, Miriam: La Concession de la Vie Héroïque dans l'Oeuvre de Romain Rolland. (Le Cercle du Livre, Paris, 1956)
- /RR/1/147/ Starr, William Thomas: Romain Rolland and a World at War. (Northwestern University Press, Evanston, 1956)
- /RR/1/148/ Jouvo, n. J.: Romain Rolland Vivant, 1914-1919. (Ollendorff, Paris, 1920)
- /RR/1/149/ Arcos, René: Romain Rolland. (Mercure de France, Paris, 1950)
- /RR/1/150/ Doisy, Marcel: Romain Rolland, 1866-1944. (Ed. "La Boétie", Bruxelles, 1945)
- /RR/1/151/ Grappin, Pierre: Le Bund Neues Vaterland. (1914-1916) - Ses Rapports avec Romain Rolland- (IAC, Paris, 1952)
- /RR/1/152/ Cheval, René: Romain Rolland, l'Allemagne et la Guerre. (Presses Universitaires de France, Paris, 1963)
- /RR/1/153/ Cheval, René: Romain Rolland, l'Allemagne et la Guerre. (Presses Universitaires de France, Paris, 1963)
- /RR/1/154/ Barrère, Jean-Bertrand: Romain Rolland: L'Âme et l'Art. (éd. Albin Michel, Paris, 1966)
- /RR/1/155/ Barrère, Jean-Bertrand: Romain Rolland: L'Âme et l'Art. (éd. Albin Michel, Paris, 1966)
- /RR/1/156/ Arcos, René: Romain Rolland. (Mercure de France, Paris, 1950)
- /RR/1/157/ Baudouin, Charles, etc.: Hommage à Romain Rolland. (éd. Mont-Blanc, Genève, sans date)
- /RR/1/158/ Abraham, Pierre, etc.: Romain Rolland. (Langages A La Baconnière, Neuchâtel, 1969)
- /RR/1/159/ Romain Rolland et la Belgique. Hommages-Textes-Souvenirs
- /RR/1/160/ Reljis, Eugen: Romain Rolland. (Ed. "Humanidad", Montevideo, 1951)
- /RR/1/161/ Sirotot, Pierre: Romain Rolland. (Desclée de Brouwer, Belgique, 1968)
- /RR/1/162/ Rolland, Romain: Textes Politiques, Sociaux et Philosophiques Choisis. (Ed. Sociales, Paris, 1970)
- /RR/1/163/ Le Disque Vert 6. 2<sup>me</sup> année-mars-avril 1954.  
Hommage à Romain Rolland. (Paris, Bruxelles)
- /RR/1/164/ Bonnerot, Jean: Romain Rolland, Son Œuvre. (Ed. du Carnet-Critique, Paris, 1921)
- /RR/1/165/ Sénéchal, Christian: Romain Rolland. (La Caravelle, Paris)
- /RR/1/166/ Descotes, Maurice: Romain Rolland. (Ed. du Temps Présent)
- /RR/1/167/ Barrère, Jean-Bertrand: Romain Rolland par lui-même. ("Ecrivains de toujours" aux éditions du Seuil, Paris)
- /RR/1/168/ Rolland, Romain: Jean-Christophe et Arnel. Correspondance entre Romain Rolland et Jean Bodin. (éd. Aime Brachet, Lyon)
- /RR/1/169/ Kobichez, Jacques: Romain Rolland. (Hatier, Paris, 1961)
- /RR/1/170/ Rolland, Romain: The Fourteenth of July. - A Play of the French Revolution- (George Allen and Unwin Ltd., London, 1928)

- /RR/1/171/ Kurata Hyakuso: Le Prêtre et ses Disciples. -avec une introduction par Romain Rolland- (Les Editions Kieder, Paris, 1932)
- /RR/1/172/ Harris, Frederick John: André Gide and Romain Rolland: Two Men Devided. (Rutgers University Press, New Jersey, 1973)
- /RR/1/173/ Starr, William Thomas: A Critical Bibliography of the Published Writings of Romain Rolland. (Northwestern University Press, Illinois, 1950)
- /RR/1/174/ Pérus, Jean: Romain Rolland et Maxime Gorki. (Les éditeurs Français réunis, Paris, 1968)
- /RR/1/175/ Rolland, Romain: Le Périple. (éd. Emile-Paul Frères, Paris, 1946)
- /RR/1/176/ Zweig, Stefan: Romain Rolland, -the Man and His Work- (Thomas Seltzer, Inc., New York, 1921)
- /RR/1/177/ Romain Rolland -Weltbürger zwischen Frankreich und Deutschland. (Süddeutscher Verlag, 1967)
- /RR/1/178/ Rolland, Romain / Tagore, Rabindranath: Rolland and Tagore. (Visva-Bharati, Calcutta, 1945)
- /RR/1/179/ Rolland, Romain, etc.: Horizon, Revue des Lettres 2. -Nouvelles-Essais, Chroniques-Poèmes- (Horizon du Mois)
- /RR/1/180/ Chamson, André, etc.: Romain Rolland; Sa Vie, Son Oeuvre 1866-1944. (Archives de France-Hôtel de Rohan, Paris, 1966)
- /RR/1/181/ Sices, David: Music and the Musician in Jean-Christophe: The Harmony of Contrasts. (Yale University Press, 1968)
- /RR/1/182/ Zweig, Stefan: Romain Rolland-Sa Vie...Son Oeuvre. (Les Editions Pittoresques, Paris, 1929)
- /RR/1/183/ Lévy, R. Arthur: L'Idéalisme de Romain Rolland. (A.-G. Nizet, Paris, 1946)
- /RR/1/184/ Doisy, Marcel: Romain Rolland 1866-1944. (éd. La Boétie, Bruxelles, 1945)
- /RR/1/185/ Rolland, Romain: Michel-Ange. (Editions Albin Michel, Paris, 1944)
- /RR/1/186/ Rolland, Romain: Le Théâtre du Peuple. (Librairie P. Ollendorff, Paris, 1913)
- /RR/1/187/ Relgis, Eugen: El Hombre Libre Frente a la Barbarie Totalitaria. -Un Caso de Conciencia: Romain Rolland- ("Anales de la Universidad", Entrega Nº 168, Montevideo, R. o. del Uruguay, 1954)

ロマン・ロランが生まれたのは、60年前のことです。それはクラムンというフランスのちいさな村でした。彼は通常の学校の課程を終えました。だが、彼の最も個人的な好み、つまり音楽が好きだということは、すでに幼くして、彼が全ヨーロッパ的な、総合的、包括的人間であることを暗示するものです。魂の底から音楽的な傾向をもっているひと、肝心なのは技術的なことがらではなく、魂の底ということですが、そういうひとは、はっきり目につくものではなくとも、たえず溢れでる調和への欲求を心に抱いているものです。ロマン・ロランは、そういう意味で、もっとも深く音楽的な人間でした。音楽は彼に、先ずすべての民族を、感情の面ではひとつであると見ることをおしえてくれました。それでも彼は音楽をただ感情だけで受けとめることをしないで、知性をもって努力をかさね、熱情をもってとられました。音楽が彼の大学での研究の対象となり、音楽史を研究して、22歳のときには、研究の完全のために、奨学金でローマに留学することになりました。そしてローマで、この若いフランス人ロランの全ヨーロッパ的なものへの新たな成長がはじまります。偉大なモニュメンタルなもの、レオナルドやミケランジェロによって、イタリアの偉大さを知ります。彼の見たイタリアの過去の芸術のもっとも偉大な姿と風光のうつくしさを、それに加えて音楽でした。すでに彼というフランス人は、フランス以外の第二の世界を愛していたわけですが、そもそもわたしたちヨーロッパ文化のしめす、偉大な三和音のためには、そこにはまだ第三番目の音、つまりドイツが欠けていたのです。だが、運命はえらびだした人間にたいして、いつも自分の使者をつかわすものです。かくして注目にあたいることがおこったのです。かつてドイツの地を踏んだこともないロランが、ほかならぬイタリアで、ドイツを理解する道を見いだしたわけです。彼はローマで、70歳の女性と知り合いますが、みなさんはこの女性の名前をごそんじでしょう。彼女はマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークであり、最後のゲーテ的なドイツ人のひとりであり、普仏戦争の1870年ではなくて、ゲーテの死んだ1832年、そしておもうに1848年が最大の体験だったドイツ人のひとりなのです。彼女はリヒアルト・ヴァーグナーやニーチェやゲルツェンやマツィーニとの交友によって、精神の最後の二人、ヴァーグナーとフリードリヒ・ニーチェの思想を胸のうちにたくわえ、身に体现した最後のひとだったのです。23歳のロランはこの女性と友情をむすびます。ただし、これはおよそ本物のなかでしか見られないような友情、まぎれもなく感動的な、こまやかな、親愛のあふれた友情でした。

ひとつの国民を見るにあたって、〈下から〉、つまり旅の気分で、ちいさなホテルや偶然であった不快なできごとやめぐりあいからではなくて、〈上から〉、つまり偉大な人間のはっきりした創造的な人間のイメージから見るといことが、こんなかたちで彼のなかにその典型をしめしたわけです。彼はここで、あらゆる国民を、そのなかのえらばれた人生において、英雄的に見ることをまなだのです。この信念は、終生かわることはなかったのです。いいかえるなら、どの国民においても、最高に成しとげられた仕事こそ、世界にたいして、——神にたいしてと言ってもいいでしょうが——評価され、顧慮されるべきもので、けって政治や、ある時期の突発的な出来事が問題になるのではないということ